RPGヒロインという名のチート野郎。

菜智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＰＧヒロインという名のチート野郎。

【Ｎコード】
Ｎ５８４９Ｙ

【作者名】
菜智

【あらすじ】
大人気ＲＰＧ（ファ〇コン並みに古い機種）のヒロインが現実に飛び出してきた！！そのヒロインはゲーオタの心を鷲掴みにした強い天然ツンデレ……の筈だったのに。実際はツン…もとい傲慢９割のデレ１割の超我侭・横柄な＜ＴＨＥ女王＞でチート持ちのヒロインでしたとな。
そんな傲慢９わｒ（ｒｙのヒロインが現実で飛び出した先にはニートだが頭の冴える少年・集がそのゲームをしていた。
そんなチート＆女王ヒロインと出会ってしまった頭の冴える集はヒ

ロインが巻き起こす出来事に巻き込まれていきますよっと。

第一章……ＲＰＧ編（終了）
第二章……宝探し編（現在更新中）
※時々番外編が入ったりします。

対処1．まず、自己紹介。んで、居候。

ー神とのゲーム。～それは気まぐれ～ー
そのゲームは何処の会社の誰が作ったのかも分からない、まったくもって謎の多い人気ＲＰＧゲーム。
だが、その劇中に登場する主人公のヒロインが余りにもヲタクの心を鷲掴みにし、古い機種でありながら絶大なヲタク支持を受けている。

そのゲームを、例に漏れることなくしているのが俺、上南集（カミヤシュウ）である。
容姿は、まぁ…何処にでもいる平々凡々な感じで想像してくれ。自宅警備員（ニート）のゲーヲタだ。
だが、ゲームをしていると後ろから、自分しかいない部屋の、自分の背後から。
『ほぅ。私はこうして動いているのか。中々、面白い。』
思いっ切り大人びた声がするものだから、後ろを恐る恐る振り返ってみれば
『ん？どうした。私に構わずゲームを進めてくれ。私もこのように見るのは初めてでな。』
見た目そのまんま、今、俺がしているゲームの大人気ヒロインがいた。
「……」
取り敢えず、後ろの＜誰か＞は無視してゲームを進めていく。が
『ほぅほぅ。』
だとか
『このダンジョンはこうなっているのか…。いやはや、興味深い。』
とかずっと言われていれば気にならない筈はなく。俺は一回セーブをすると、メニュー画面にして再度後ろを向いた。＜誰か＞はいつの間にか我がもの顔で俺の後ろにあるベッドで寛いでいた。

『あ！何故止めた！？私は見たいと言うに……。』
「ちょっと待て。」
見るからに、ザ・ファンタジーな服に寄ったシワを伸ばしている＜誰か＞を見ていると
『全く…。どうしてこうシワが出来るのか…』
いや、普通ですから。それ。
『おい、お前。早くゲームを再開しろ。私は見たいんだ。』
この大人気ＲＰＧヒロインを支持しているヲタクからしたら、きっとこの性格は……どうなのだろう。
「あの、さ。貴方は、誰ですか」
『私か？私はお前のしているゲームのヒロイン。名前は、ナツメ。』
俺は心の中で盛大に溜息を付く。もちろん、表には出さないが。
「で、そのゲームのヒロイン様が何故俺の、一プレイヤーである俺の所にいるんですか？」
『さぁ。それは私の預かり知る事柄ではない。』
いやいや、そんな事をどや顔で言われても。どうしろと？
『ここに出てきたのは、私自身の意思では無いからな。』
「じゃあ、誰の意思？」
『……え、と。』
自称ヒロイン・ナツメは少ししょんぼりとしたような、少し言いづらいような顔をした。
『……ゲームの、ボス。』
そんな顔を急に赤らめてぼそぼそと言われて、ときめかない男などいないはずはなく。
「…はぁ。」
だが、そんな現実からぶっ飛んだ事を受け入れる脳など生憎、俺には備わっていなかった。
『ごほん。……とにかく、だ。これから暫くの間、ここで世話になる。』
「……は？」

俺はナツメの言葉を聞き返した。今、なんて言った。
「あのさ。ゲームの中に戻ってくれますか？」
『無理だ。戻れる場所はゲームの何処かのダンジョンらしいからな』
「…つまり、そのダンジョンを見つけないと戻れないと？」
あー。頭痛い。遂に、自宅警備員（りっぱなニート）丸三年の俺にも幻覚が……。
『と、いう訳で。これからよろしくお願いします。な？』
にっこりと笑うナツメの顔が若干怖く見えた。その笑顔の後ろに俺は武器を構える悪魔を見た。多分。
…これは、面倒見なきゃいけないんだろうなぁ…。
これから起こるであろう様々な問題（大体は友達が関係するが）頭が回りそうだ。
…取り敢えず、俺はこのナツメとやらをゲームの中に戻す為にゲームを再開した。
……後ろを気にしないように。

対処2．チートは現実でもチートｗｗ

前回までの振り返り。
大人気ＲＰＧから飛び出して来たヒロイン様はかなりのツンが多いヒロインでした。おまけに、ちょっとの天然。
そんなツンツンデレ少女と一プレイヤーの自宅警備員（チートヒロイン）（りつぱなニート）丸三年の居候物語。

ナツメのちょっと機械じみた声にも慣れ、サクサクとまではいかないがそれなりにゲームを進めていた頃。
俺の胃が空腹の抗議の声を上げた。時間を見れば、大体3時ぐらい（暗くてそれ以上は見えない）だろう。
そろそろゲームへの集中力も切れてきたため、俺は冷蔵庫から晩ご飯の残りを取り出すと後ろで眠っているナツメを起こさないようにご飯を食べた。意外と減っていたのか、胃がもっともっとと食べ物を求めてくる。
気づけば残り物はなくなっていたが胃はまだ足りないと言わんばかりに抗議の音を鳴らし続ける。
ぐぅ。
うん。腹減ってるなぁ、俺の胃よ。まだ足りていないんだろう？分かっているさ
ぐぅぅ。
だが、それは鳴りすぎだろう。
ぐるぅぅぅ。
自分の腹の音ではない音が俺の後ろで唸る。さぁ、落ち着こう。そして、振り向くんだ。
振り向けば寝惚け眼のナツメが恨めしそうにこちらを見ているではないか。
「……狡い。」

「…は？」
「ご飯……狡い。私はまだ食べていないぞ。」
あぁ、あの時にバッチリ起きてて見ていたと。取り敢えず俺はナツメの機嫌をこれ以上損ねない為に、冷蔵庫に行って何か食べる物を探したが……生憎と無かった。
「……無い、のか？」
「あぁ、さっぱり全くだ。明日になればネットで頼んでいたのが届くから明日まで我慢し」
「じゃあ、外に買いに行くぞ。」
…は？今、自宅警備員（ニートとひきこもり）にとっての禁句が出てきたが。
「下には、コンビニエンスストア、があるのだろう？」
「買いに行け、と？」
「そこまで私は鬼畜ではない。私もついて行ってやる。」
あくまでも傲慢ツンの態度は崩さない。ここまでいくともう清々しい。
だが、ここで折れてしまっては自宅警備員（ニート）の名折れ。俺は若干強く。
「俺は外へは出ない。行きたいなら場所を教えるから行ってくれれば？」
「…我を通すつもりか。私に対して。…いい度胸だ」
ナツメは口を手で押さえて小さく、くっくっく、と笑った。そして、いつもの傲慢な微笑みで。
「なら、私が連れ出してやろう。お前の意思とは関係なく、な。」
「何言って」
ナツメは俺の言葉を無視して。
「迅風（シュンプウ）」
その言葉が聞こえてからほんの一瞬だけ、目の前が真っ暗になりナツメの声だけが聞こえてくる。
「どうだ？私の魔法は」
目を開ければそこにはよく見知っているコンビニ＜7時11時＞があった。

「……は？」
「私が魔法を使ってここまでワープ、転移してきた」
「魔法って…！？ここは現実世界だろ！」
そう反論した俺にナツメは特に悪びれる事もなくさらりと。
「私には現実も何もない。私にはただ、魔法を使えるという事実があるだけだ。」
そんな言葉に俺は言い返す気力もなく、ただ項垂れた。

こうして、俺の自宅警備員（ニート）生活は三年という短い期間で終わっちまった。

対処2．チートは現実でもチートｗｗ（後書き）

はぁじめまして！今回はちょっと嗜好を変えてコメディっぽいお話です（、・∀・´）
ゲームのチートヒロインが暴れまくりますｗでも、ちょっとシリアス投入してみたりｗ
ちなみに。私は最近（ちょっと前かな？）シリーズ１５周年を迎えた某シリーズが大好きです。７〇５さんのね（´∀、＊）

対処3．ゲームの戦いは現実では結構なハードｗｗ

前回までのあらすじ。
ツン…もとい、傲慢（ツン）デレなヒロイン様の現実丸無視の魔法によって俺の自宅警備員（ニート）生活は呆気なく終わってしまった。…なんだかなぁ。

コンビニ＜7時11時＞である程度のご飯（勿論ナツメの分も込みで）をどっさりと買い込む。
その中にはご飯…なのか食玩やら期間限定のお菓子やらも入っている。財布が悲しい…。
「早く帰るぞ。」
そんな俺の気も知らずに、ナツメは幼い子供のようにニコニコと微笑む。口調は何ら変わっていないが。
「…はぁ。はいはい。了解しましたっと。」
俺はどっさりと入ったビニル袋を持ち上げると、ナツメが怪訝な顔で辺りを見回している。
「どした…？早く帰るんじゃ「静かに」
ナツメは何時もとは違う声で俺の言葉を遮った。その只ならない雰囲気に俺は黙り込むしかなかった。
「…先に帰っていろ。私の分は取るんじゃないぞ？取ったら、分かっているよな…ん？」
ナツメは俺にそう言うと、足早に帰る方向とは逆の…俺が子供の頃によく行っていた公園へと走っていった。
俺は何かを感じつつも、ナツメのあの雰囲気を再び思い出してそのまま帰路を歩き始めた。

集が完全に去った事を確認して、ナツメは公園に続く並木道の木々に語りかける。

「さて、どうした…。私に何か言伝たい事柄でも？」
『いいえ。単に私が興味を持っただけですよ。ゲームでしか存在しない架空の者が生きている様子に。』
並木の木々から響くような声が反響してナツメの耳に届く。
「姿は見せてくれないのか？私はしっかりと相手を見ないと話せない性格なのでな。」
ナツメは楽しいかのように微笑んだ。その笑みは酷く美しく、妖艶。
『貴方の頼みは断れませんからねぇ……。<あの方>からの命令もありますが』
木々が風も吹いていないのにざわざわと靡き始める。空は清々しいほどの黒と青の相まった見事な景色だが、それとは反対に空気は緊張していた。
「腕試し、というものか？…いいぞ。来いよ」
靡いていた木々の木の葉が散り、一斉にナツメ目掛けて飛来する。だが、ナツメはそれに何の興味も示さない。
ただ、先のように妖艶な笑みで。
「…水槍（スイオウ）」
ナツメに飛来していた木の葉…刃ほどの強度まで強化されていた木の葉が宙でピタリ、と動きを止めた。
ナツメの後ろに仁王立ちするのは水で創られた龍。そしてその頭上で次々に展開されていく同じく水で創られた流星群。木の葉は水に圧倒され、次第に数を減らしていく。
『……ははっ…』
唐突に、声が笑った。その笑いに同調するように木の葉は数を増やして、ナツメに襲いかかってくる。
ナツメはまた水龍に命じて、木の葉を水の流星群で打ち消していく。と、ナツメはある事に気が付いた。何枚かの木の葉がナツメの後ろ、そして、水龍の後ろを通り抜けていく。
先の声が発した唐突の笑い声と、今の木の葉の動きから推測される答えはたった一つ。

（後ろに私が動揺するものがある……っ！！）
ナツメは後ろを向かずに、直ぐ様もう一つの魔法を作動させる。
「っ影身（ウツシミ）！」
ナツメの影を借りて創られたもう一人の＜ナツメ＞は本体であるナツメの意思を受けて、直ぐ様後ろへと瞬間で移動すると＜ナツメが動揺するもの＞を木の葉の刃から守るためにナツメの力を受けて魔法を発動する。
「“護花（ケンカ）”」
影の＜ナツメ＞と＜ナツメが動揺するもの＞に覆いかぶさるように、大きな睡蓮の花が現れる。
「全く。私は帰っていろと、言っていたはずだが」
ナツメの口調はしっかりと怒っていた。しかし、その表情は驚く程に穏やかに微笑んでいた。
「…ははっ。まぁ、ヒロインが戦うのを見るのも悪くないかな。」
その表情に少しは驚きながら、集は言い返した。ナツメは小さく、誰にも聞こえない声で

「馬鹿。」

対処3．ゲームの戦いは現実では結構なハードｗｗ（後書き）

…戦闘シーン楽しかったです。多分一番早いペースで戦闘シーンは書いていたと思いますｗｗ

対処４．チート戦闘終了のお知らせ。

前回までのあらすじ。
取り敢えず、ゲームの戦闘が現実世界でも起こっている…としか、言えない。

「さて、と。もうこれで終わりか？」
ナツメの勝ち誇る顔が集の脳裏に浮かび上がる。
『……秘欺（ヒメギ）。』
声の響きが薄れていくと共に、木の葉はただの葉っぱとして地に落ちていく。代わりに、並木から姿を現したのはゆらゆらと陽炎のように揺らいでいる影。しかし、それはしっかりと歩みをナツメに進めていく。
「バックアップシステム、作動。リンク、オールグリーン。」
影の＜ナツメ＞も後ろの集を護りの花“護花（ケンカ）”に包み込ませたまま、ナツメの隣りに寄り添うように立ち、言葉を二人で紡ぐ。
それが集にはゲームで一度だけ見たことのある技に見えた。
『…言の葉の紡ぎし、彼方に消えた夢幻よ。ここに。』
二人の間からちらちらと溢れていく光の欠片が次第に大きな鳳凰を創り。
『其方は我と共に、照らす光と在れ。』
形作られていく鳳凰は大きく翼を広げ。舞い踊る光の欠片は桜の花弁を模していく。
『誉の翼（プライデウスング）』
鳳凰の清く滑らかな咆哮が周囲に優しく響きわたる。
「お前の技…秘欺（ヒメギ）は、一度に己の分身を大量に発生させる。そして、一体ずつで倒しても直ぐに分身はまた現れる。…私の影身（ウツシミ）の量産系か？」
桜の花弁となった光は先の木の葉のように鋭い刃のような特性を持

つ。
「でも、一度に倒してしまえば何の問題にもならない。」
……ふぁ、さ……ざぁぁぁぁぁぁぁぁ…
光の刃が鳳凰の羽の羽撃きによって、刃となった花弁は次々に影を撃ち抜き数を減らしていく。
だが、その中でナツメは小さな違い…異変に気付いた。
撃ち抜かれていく影の残滓が次第に一つの影に集まっていく事に。
その影は大勢の影よりもかなり後ろの方…まるで指揮官でるあるかのように立っていた。
（つまり、あれが本体…！）
ナツメは、鳳凰の動きを止めるとその影へと微笑んだ。
「全く出てこないからいつもの影（ウツシ）かと思っていたが…そうではなかったな。」
影は口をニヤリ、と歪ませて
『流石は“神力（チート）”の名を冠するだけあって見破られましたか…いやはや残念。』
影の漆黒の黒が糸のように解けていく。その後、現れたのは白髪を腰にまで靡かせている中性的な顔立ち、体をした、しかし男性。
「久しいな。いや、ゲームでは一回のイベント戦闘でしか会ってはいないかアサギ・リヴェリアス」
『確かに。しかも私は影（ウツシ）を通してでしか見ていませんものねぇ。ナツメ・イゥエ・リスティアート。』
二人は和やかな微笑みで。…互いに火花を散らして。
「で。お前が来たということは何かは預かっているのだろう？でなければ、お前が興味本位でこんな所に来る筈がない。あいつは何て？」
男性…アサギは先の微笑みから一転、表情が一変した。何も感じない無表情へと。
『後、三日。それまでに、全てを断ち切るか…自ら<絆>を壊してくるか。』

ナツメの顔に亀裂がはしる。だが、アサギはそのまま静かに礼をすると霧のように霧散して消えた。
“護花(ケンカ)”が消えて集はナツメの所へと向かって、その表情を見て驚いた。
「……あ。どうした？」
ナツメの表情は何かを恐れているような、それでもそれは直ぐにいつもの傲慢な微笑みに戻っていた。
「何を言われたんだ？」
「…知りたいか？」
ナツメは自分の影身(ウツシミ)を戻すと少し迷ってから。
「ゲームの中に戻れる方法がある、と…」
「良かったな！」
集の余りにも嬉しそうな反応にナツメは少し（いやかなり）ムッとした顔で、尚且つ明白に機嫌悪い声で。
「嬉しそうだなぁ…。まぁ、いい。帰るぞ。」
さっさと歩くナツメに集は慌てて追いかけた。

結論
チートキャラ同士の戦闘は見る分は楽しいが、巻き込まれると結構…見応えはあるが同時に生命の危険もある。爆風とかぱないw

対処5．チートのご機嫌ナナメ。

あれから…現実世界で起こったチート同士の戦いの後から、ナツメの様子がどうもおかしかった。
いつも何処か上の空で、俺を見て溜息をついたり…今までに無かった事が。
「ナツメ。お前、どうしたんだ？あの戦いの後から様子が変だぞ。」
「あぁ。気にするな…。別にお前に何か迷惑をかけるでもなし、これは私個人の問題だから、な」
そう言ってまた上の空。こうなってしまってはこっちの調子も狂ってしまう訳で。
まぁ、当然、ゲームも進められないと。
「お前、何悩んでるんだよ。ゲームの中に戻れるんだろ？」
緩々とナツメは首をこっちに向けた。よく見れば目の下にはうっすらと隈が出来ていて。
「…そんなに私が帰る事が嬉しいのか。」
「え？そりゃあ…だってお前の生まれた場所だろ？帰りたいとは思わないのか？」
「…生まれた場所…か。」
ナツメは自嘲するような微笑みを浮かべて、それをまた直ぐに消した。そんな表情を見たことが無いから俺は何か問題でもあるのか、と思ってそれ以上は聞かなかった。
…聞くことが出来なかった。
「さて、少し消える。結構居なくなると思うが…気にするな。」
ナツメは何も考えていないかのような顔で俺にそう言う。
「…もし、私が本当に消去（きえ）たら、どうする？」
そんな質問が唐突にナツメから聞こえた。俺は直ぐに答える事が出来ず、考えている間にナツメは光となって消えてしまった。多分、あの魔法…迅風（シュンプウ）を使ったのだろう…僅かなそよ風が部屋を駆けて消

えた。

一陣の風が何処かの病院の何処かの病室にそよ風として舞う。風の後にはナツメが立っていた。
ナツメの視線の先にはベットに横たわり、眠っている少女。触れてしまえば脆く崩れてしまいそうなほど儚く見える少女は辛うじて生きている。聞こえない程の寝息で。
「……このままだったら、良かった…？」
一人、ぽつり、と呟いても応えてくれる人は誰もいない。
「分かんないよね。うん…分かってる。だって」
白すぎる病室に新たな風が舞い踊る。ナツメは少女の頬にそっと触れた。
肌色も見えない程の肌の色。生きているのかも分からない冷たさ。
まるで、それは人形。
「…いつまで続くのかな」

“いつまで？私が飽きるまで。”

何処からか響く声はアサギのような中生的な声ではなく、しっかりとした意思を持ったしかし何処か気の抜けた声。

“いやいや。全く予想外だな。君の性格ならさっさと言っていると思っていたのに。残念”

「お前…いつからここだと分かった？ここが私の…」

“さぁ？でも僕にとってはそんな事はどうでもいいんだ。”

“君という玩具（ゆうしゃ）が中々帰ってこないからさぁ、僕、暇人なんだよね”

「知らないな。お前の都合なんて」
“んー。でもここでの君も結構面白いからさぁ…。もう少し鑑賞させてもらおうかな？”
「…はっ。私を野放しにしておくとはな。面白い」
声はくすくすと、子供のように笑った。
“後二日。それだけ経ったら僕は君とぉ君の近くに居る人へとびきりの贈り物をしてあげる。”
「……消えろ。」
“うん。そろそろ戻らなくちゃいけないからねぇ。それじゃあねぇ☆”
声は耳に響くままに消える。残されたのはまた静寂。
「…私、は」
呟きに応えてくれる者も、いない。

対処5．5．ゲーム話。（前書き）

今回は本編ではありません。ちょっとした息抜き用の話ですので気楽に見てもらえれば良いと思います。中身はギャグっぽい（？）です

対処5．5．ゲーム話。

「さて、今回はいつもの話とは違って…ちょっとした息抜きで読んでもらえると私は嬉しい限りだ。」
「あのさ…ナツメ。せめて何をするのか位は喋れって。あー、えと…すみません」
集がペコペコと頭を下げる。
「今回は私がヒロインを務める大人気ＲＰＧゲームのあらすじを紹介しようと思っている。」
「大人気って自分で言うか普通…」
「何か言ったか？ん？」
ナツメの極上の微笑みは実はかなり怒っている証拠だったりｗｗ
「はぁ…さて、それじゃあ紹介しますか。余り文字数ももらっていないからな」
「文字数など関係ない。いざとなったら私が作者に攻撃魔法をぶっぱなしｔ（ｒｙ

暗転☆（只今、集が必死にナツメを説得しています。暫しお待ちください。）

「…それでは、あらすじをご覧下さい。」

静かな音がいつも世界中に奏でられる世界・オリシア。その奏でられる清らかな音が消えた時、世界に光では決して照らされる事の無い漆黒の闇に包まれていく……。
その時、誰かが願った。否、誰かではない。世界中の皆が願った。

＜どうか、この救われぬ漆黒の闇をも照らす優しく、清らかな真光（ヒカリ）を…。＞
その願いが誰に届いたのか、それは誰にも分からない。そして、願いは成就された。
世界の何処か、誰も知らない、世界すらも知らない、近くて遠い場所で生まれ堕ちた存在を誰からも祝福されず、神にも見離された清らかな真光（ヒカリ）。
その名は、ナツメ。幻の透き通る桜に誘われた者。
人々の数え切れない程の願いを、己に生まれてから身に封じられていた記憶と過去を背負って。
そして、たどり着く。闇の主へと…自分と同じく誰からも祝福されなかった者へ、ナツメは問う。
「ねぇ…　　」

（こうしてあらすじをしっかりと見るとナツメがナツメっぽくないなぁ…。何というか）
「こうしてあらすじをしっかりと見るとナツメがナツメっぽくないなぁ…。とか思っていないだろうな？」
「……（；＾ω＾）」
「よし、お前。そこから逃げるなよ？」
ナツメが何故かメリケンサック装備で近付いてくる。こうなれば、手段は一つ。
「……俺、生命は大事にする奴だから！ε＝ε＝ヾ（；。Д。）／」
集は逃げた！しかしナツメに囲まれた！！
「ふ、ふふふ。逃げられると思うなよ……？」

暗転☆

「それでは、また本編で会おう。」

「ま、また本編で頑張りまｓ（ｒｙ」
がくり、と集の頭が落ちた。

対処6．新たな波乱はやはりアイツが持ってきたw

「んぅ……ふぅ。」
ごろり、と俺のベッドでナツメが寝返りを打つ。只今、朝の6時を過ぎたところです。
先に言っておこう。俺は変態ではないという事を。
「…は、ん。」
確かにナツメの寝顔はしっかりと見てはいるが、それは不可抗力の結果であって…。えっと、今の俺の姿勢は…、ナツメに腕を掴まれて（もんのすごい力で）ベッドにダイブ。離れようにも力が強すぎて離れられないという
（何の漫画だよ…。このベッタベタな展開は）
「…ん。」
またごろり、と寝返りを打った瞬間俺の心臓は許容範囲を軽く超えた。ナツメの顔が、とにかく近い。
互いの寝息がかかる程に顔が迫ってきている。おまけに、ナツメのいつもより緩んだ顔もかなりのレアな訳で。そんなチャンスの時に離れるなどという愚かしい事をする事など言語道断。
ばくばく、と鳴り響いて仕方がない心臓を無視して俺はその姿勢を維持し続けた。

…後にこの行為が仇になるとは分からずに。

「…信じられない。お前、一回マジで死ぬか？」
「だから、ごめんて。」
あの後、起きたナツメにこてんぱにされたのち…ゲームを再開した。もちろん、盛大なビンタＯＲキックを見舞われた訳だけれど。ビンタの痛みが中々引いていかないなか、唐突にインターホンが鳴る。
「はぁーい」

がチャリと扉を開けても、誰もいない。
「ピンポンダッシュか？」
「ピンポンダシュじゃなかねぇ！」
下を見下ろせば、そこにはぶかぶかのローブを着たちっさい女の子。服装の模様から察するに…。
「ナツメに何か用か？」
「其方、姉様を知っていうのですか？」
あー、うん。このぶっ飛んだ感じはあいつの知り合いだな。
「ユサギ…？どうしてここに」
ナツメがノロノロと奥から顔を出す。女の子（ナツメが言うにはユサギ）が嬉しそうに手をぶんぶんと振る。
「姉様ー。ユサギ、ここまで来たんだぉ。すっごいでそぉ？」
「ナツメ…この人は？」
「あぁ、私の妹のユサギ・イヌェ・オーファだ。」
ナツメがユサギに中に入ってくるように手招きをする。ユサギは靴を脱いで入っていく。一応、俺の部屋ですが？
「姉様。そろそろお家に戻ってくらさいぃ！あたしだけじゃ、お家を維持し続けるのはもう無理ですぅお！」
「そうは言っても…。私はここが気に入ってる。だからここからは出ない。」
ユサギは、むぅ、と大きく頬を膨らまして手をバタバタと振って叫ぶ。
「早くしないと＜あの人＞は怒っちゃうし、兄様だて維持出来ないんですぅぅ！！」
ナツメは観念したかのように深く溜息をつく。
…あぁ、やっとこれで俺の自宅警備員（ニート）生活がカムバックしてくる…。
「そこまで言うのなら、お前が私をここから引っ張り出して連れて帰れ。」
「……はぁ？」
俺は呆れたような、驚いたような声を出す。ここは俺の部屋だって

ぇの。
「分かりました！！」
おい。俺を置いて話を進めるなし。
「私が姉様を無事、連れて帰ります！！」
あー。やっぱり、こうなっちゃうのね。
俺は二人の勝手な話に意識を遠くして、考えた。
きっと、俺の自宅警備員（ニート）生活のサイクルが戻ってくるのはかなりの先だろうと。

対処7．タイムリミットとデジャヴｗｗ

あれからユサギ含めての俺の生活が始まった。
あれから変わったことと言えば、ユサギとナツメが何処かへと出かけていく事が格段に増えた。
「俺としては嬉しい限りなんだけど…なぁ。」
最近ナツメが居続けた影響からなのか、一人がとても静かに感じる。
ただ、ゲームの音だけが部屋に流れ続けた。
あ、レベルが上がった。

部屋の近くの公園の並木道をナツメとユサギは二人で歩く。正確には、ユサギがナツメの後を追いかけるといった感じだが。
「姉様ー。本当にお願いでぅから、戻ってくらさい！！」
「嫌だといったら嫌だ。お前もいい加減懲りろ。」
「あねさまぁ……。」
ユサギが頼りない声を出す。
「後三日したら<あの人>が贈り物するって言ってるけど、っ絶対怒ってますって！！姉様も、あの人も滅茶苦茶にされちゃいますって！」
ぴたり、とナツメの歩みが止まる。すかさず、ユサギが追い打ちをかけていく。
「それに！姉様の目的は果たせたのでしょう！？ならば早くお戻り下さい！」
「ユサギ。」
ナツメの声には怒気が含まれていた。
「姉様…。兄様がどうなっても、いいのですか！？」
ユサギの足音が遠ざかる。

「分かってる。それでも、私は…ここに…」
“贈り物を”
「贈り物…。」
ナツメの頬を冷たい風が通り抜ける。
何時までここにいられるかは、ナツメにも分からない。
ただ、時間が＜あの人＞が許す限り…ここに居たいと、ナツメは思う。

がチャリ、とドアが開く音がした。きっと、ナツメとユサギが帰ってきたのかと思って覗けば顔をムスっとさせたユサギ一人だった。
「ナツメは？一緒じゃないのか？」
「姉様なら一人で歩いてくるって言いました！」
ユサギはベッドにダイブするとブツブツと一人で呟く。
「大体、姉様が居ないと兄様だって維持することは難しいのにぃ…。姉様てば、ここでの生活が＜名残惜しい＞のではないのでしょうか…。でも早く帰還しないと＜あの人＞は特大の爆弾を落とすつもりでしょうしぃぃ…！」
「ナツメをどうしてもゲームの中に戻したいんだな。」
ユサギは驚いたように俺の方を見るが、今までの呟きを聞いていれば誰だって分かる。どれだけナツメを心配しているかを。
「姉様が居なければ兄様だって……」
「心配しているのか？その、お兄さんもナツメの事を」
「えぇ……まぁ」
ちらり、とユサギはカレンダーを見る。
皆様（どくしゃさま）には言い忘れていたが、今は１２月の２９日。後２日で年が終わり、新たな年が始める。
「後２日以内に戻らなければ、盛大に怒られてしまうのですぅぅ！」

「怒られるって、誰に？」
「えぇと、それは……のぉこめんと、というモノを使わせてもらうのですぉ。」
ユサギは少し気が紛れたのか、帰ってきたときよりもニコニコと笑顔を零すようになっていた。言葉遣いも戻ってきてしまったが。
「それに兄様だって……姉様が居なければ…。」
「さっきから兄様兄様って言うけどさ、何か事情でもあるのか？」
「…ゲームで、兄様を出現させる方法はご存知ですか？」
ナツメの、ヒロインの兄がゲーム内に居るなどそれまで一回も聞いたことがない。自他共にゲームヲタクである俺さえも。
「どんな条件なんだ？」
ユサギは、にま、と笑うと
「それは内緒れす！それに、時が満ちれば、分かりますよ。」
そう言うと、ユサギはベッドに突っ伏した。そのまま数分後には寝息まで聞こえてきた。全く、子供らしいというか何というか。
さらり、とユサギの髪が俺の手に一房落ちる。その感触は正に人間そのもの。とても、ゲームのキャラクターには見えない。
「ふみゅ。……にゅ…」
ごろり、と体勢が変わり顔が俺の方に向く。余りにも可愛らしいその寝顔に顔が綻ぶ。
だが、俺はこの時点で気付くべきだったのだ。
「……この」
これが、デジャヴだということに。
「っっっ変態」
あぁ、意識が飛んでいく5秒前。
「がぁぁぁーーーーーーーー！！！」
がす。鈍い音がする。
俺の意識は5秒を待たずに飛んでいった。

対処8．短いしあわせ、解かれた矛盾。

『きっと、必要としてくれる人はいる。こんなに広い世界なら。』
いつの記憶で、誰の記憶なのか。それは分からない。
でも。
『だから、全てを投げ出すような事だけは…やめる。それを約束。』
何もかもを失ってでも、その記憶だけは残したいと思った。
誰かと会話した誰かの記憶を。

「…さむ。」
朝の寒さにナツメはノロノロと瞳を開けた。見れば、集はゲームをメニュー画面にしたまま微動だにしない。寝惚け眼で見れば。
「すぅ…すぅ。」
心地よい寝息をたてていた。ナツメは思わず微笑みを零す。
だが、そこで、はたと気付いた。自分にはやらなければならない事があると。
「まぁ、半分は諦めたのに……ね。」
自嘲するように、ふ、と微笑む。ナツメは毛布をベッドから引きずり落とすと、起こさないようにそっとかける。
こっそりとゲーム画面のメニューを消すと、そこは何回か見たダンジョンだった。進んでいないのか、それともレベル上げのため来ているのかは集が眠っているため確認出来ないがその画面はナツメの不安を増殖させた。
（もう…。時間が…）
ウトウトと眠気がナツメにゆっくりと襲いかかる。
「ふぁ…ぁ」
大きく欠伸をすると、もぞもぞとベッドに戻った。

「姉様ー。」
「嫌だと言ったら嫌だ。」
またいつものように、二人が口論…只の口喧嘩をしている。
「ナツメも一回は戻ってやれって。」
ナツメは暫しの間、こっちを見ていたが
「……分かった。」
やがて溜息をつくと、妥協したように立ち上がった。
「姉様……！！」
ユサギの表情は何故か悲しそうな顔だった。
（あんなにも連れて帰りたがっていたのに？）
「と、言うわけで。」
ナツメがくるり、とこっちを見る。
「短い間、世話になったな。」
その顔は笑っていて、悲しげで。俺は思わず不安げになった。
何か、二人ともが戻りたくないかのように見えて。
「そんな不安な顔するな。どうせ直ぐに戻れるさ。それまで、精々私を思い出して一人で泣いていろ。」
「誰がそんな事するか。」
ナツメは口に手を当てて、くすくす、と
とても楽しそうな笑顔を見せた。
「姉様。では…戻りましょうか。兄様の為にも」
ユサギがそう言って、部屋の外に出る。
「ここから、帰るんじゃないのか？」
「一応、私にも感慨に浸りたい時間は必要なんだよ。自宅警備員さん？」
ナツメはまた笑うとそのまま、部屋を出ていった。

部屋を出て、並木道を二人は歩く。
「姉様…。本当によかったのですか？」
「何が？」
「あの人の事…です。何も言わなかったのでしょう…今ならまだ」
「もういい。」
「姉様……！」
「もういいって！！！」
ナツメが今までにない声で叫ぶ。その声に思わずユサギは体を強ばらせる。
「わたしはもう全て決めた。私一人で……終わらせる。」
決意したナツメを待っていたかのように体にノイズがはしり、
“お帰りなさい”
あの声が木霊する。
“全く、早々に決意してもらえて僕、嬉しいよ。”
「満足か？この結果は、お前の思う…観劇するに値するものだったか？こんな、こと」
ナツメの声がどんどん小さくなっていく。
“んぅーと。正直に言っちゃうと、余り。もうちょっとアクションがあるかなぁとか思ってたのにぃ…”
「残念だったな。ご期待に沿えなくて。」
“だから……”

キン、とナツメの頭に痛みがはしる。その痛みと共に、解れて溶けていく、誰かの大切な記憶が。
「あ……え、ぇ？」
解れていくなかで揺れて、波のように頭を駆けていく。
“もうちょっと…ね？”
「やめて…！姉様に酷い事は、しないで！！」
ユサギが手を握り締めて、叫ぶ。
“酷い事？違うよ？元に戻すだけなんだ。捻じれてしまった記憶を、ね？”
更に痛みは酷く、ナツメを苦しめる。
“いっつ、しょうたいむー。にゃは☆”
ぼん、と空に音が鳴る。
見上げれば、そこには
「花、火……？」
ユサギが呆然と呟く。
そこには綺麗な、観る者全ての目を惹きつけるような花火が上がっていた。冬に有るはずのない。それと、同時に。痛みは増して、遂に。
「あ、がっ……！？」
頭の記憶が一斉に弾けた。
時同じくして。

集もまた、頭の痛みを感じて。
耐え切れずに、そのまま意識を手放した。
集の記憶が
ナツメの記憶が
解けて、溶けて。
始まる。

対処8．短いしあわせ、解かれた矛盾。（後書き）

次からはギャグというか、明るさはなりを潜めます。
どうしても話の核に触れる部分になってしまうので…。
でも、読みやすく！わかりやすく！をモットーに頑張っていきたいです。
因みに、本編でナツメがニートの事を＜にぃと＞と言ってるのはニートの事を本人が余り分かっていないからですw

対処9．り・すたーと。

暗い、暗い海に体がゆっくりと落ちていく。
でも、そのスピードは恐ろしく遅い。
違う、これは記憶。記憶が体のようになり、落ちていく。
何処まで落ちていくのかは分からない。
終わりの無い。何時までも続くそれは、まるで続き終わらない
あのゲームのよう。

「……ん？」
集が目を開けると、何もないいつもの部屋。だが、集はそこに大きな違和感を感じていた。何かがぽっかりと抜け落ちてしまったかのように。
ただ、古い機種のゲームのＢＧＭが聞こえる。
「あれ、こんな事してたか？」
電源を切ろうと手を伸ばして、止めた。
このゲームに何かがある。自分の抜け落ちてしまった何かが。
「このゲームで、俺は何を…？」
「あー。やっぱり、でしたかぁ。」
いつの間にかベッドに座っていた女の子は分かっているような微笑みで舌っ足らずな言葉で。
「お前は？」
「あぁ…ぁたしの事も忘れてしまってぅ？姉様の記憶と一回解してしまった影響なのかぁな？」
女の子はこて、と首を傾げると。
「私は、ユサギ。貴方の抜け落ちてしまった何かを全て知っている。」
集は思わず身を乗り出して、ユサギの肩を掴んだ。

少し、力が入ってぎりぎりと肩が締まる。
「…い、たっ。…痛いです。離してぇ。」
「あ…、ごめん。」
ぱ、と直ぐ様手を離す。ユサギはニコニコと笑うとゲームのコントローラを取った。
「嘘ですぉ？大体、私はゲームでの存在ですからぁ痛み等感覚はありません。それよりもぅ、私達の事と、貴方との関係をお話しまそぅ。」
ユサギの顔が一変、何も感情を映さない瞳になる。それはまるで、ゲームに出てくるＮＰＣ。その様子に、集は只、信じるしかなかった。

やがて、ゆっくりと落ちる感覚が消えていく。
地、なのか分からない。そこはとての柔らかくて地に足を付けているというよりも、浅めの沼に足を浸しているかのような…。

“お帰りなさい。待っていた、ずっと。”

あぁ、この声に私は何故か安心する。忌み嫌っていた筈のその声を。全てを奪って、私を閉じ込めた、この声に。

“君の願いは届かない。彼の記憶は全て解けてしまった。君の事も、短い間過ごしたあの頃も、彼の中には一つも残ってはいない。”

そう、私は只、あの人ともう一度会いたくてこの場所から抜け出した。
私はとても傲慢だったけれど、それで、あの人を困らせたけれど、それでもあの人は笑っていて。
それだけで、もう良かった。例え、全てを忘れてしまおうがあの人

が笑顔でいてくれるのなら…満足。

“君は満足したのでしょう？なら、次は僕の番。さぁ、ゲームの続きをしよう？君が来るのを…、待っているよ？”

キャラじゃない事を言う、って笑ってくれるのだろうな？きっと、お前は。

自嘲するように笑って、私は呟いた。

「ログインする。強制シャットダウンを選択コマンドから消去。」

もし、もう一度会えるのなら

きっと、私は出来るかな？

元の私で。

「　　。」

って言えるといい。

さぁ、ゲームを始める。もう、現実（あのころ）には戻れない

対処１０．ゲームログイン

「で、貴方はここまで聞いて何か質問はありますか？」
「……えっと。」
ユサギが全てを話終えて、集は溜息混じりに声を出した。
それもそのはず。ユサギの口から零れ出てきたのは普通には有り得ないような事ばかり。
（でも、信じられる話……でもある、のか？）
集はユサギの首をこてり、と傾げる様子に脱力して息抜きに、とコーヒーを持ってきた。二つのカップを持って。
一つはコーヒー。そしてもう一つはココア。
「ほら。取り敢えず、これでも飲んだら？ここに来てからずっと何も食べてないしさ。」
「…ふわぁ…。」
ふわりと立ち上る湯気から香るココアの甘い香りにユサギは…ユサギのお腹が、くぅ、と鳴る。
「飲んでいいよ。別に毒とか入っている訳でもないし。」
「……いいの、ぉ？」
ユサギは暫しの間ココアをじっと見つめて、手に取ると
「……ぷはぁ。」
一気に飲み干した。一応、温めの温度にしておいたため火傷する事はなかった。
「おーいしかったのですぅぅ！！」
「それは、どーも。」
「でも、いいのれすか？ここまでしてもらってぇ……」
「いいよ、別に。色んな事を話してくれたお礼的な？まぁ、気にしないでよ」
集は一口、コーヒーを嚥下するとユサギを見る。
「で、俺にして欲しい事は？」

「貴方の記憶を取り戻します。それが、貴方にとっても姉様にとっても大切な事だから。」
「その方法がゲームにある、と。」
「はい。ゲームの中のボスが全ての鍵を握っています。貴方も、彼女も<あの人>に絡まっている。」
ユサギはにっこりと笑うと、ココアの入っていたカップを両手で包み込む。
「私は、貴方になら姉様を……救ってもらえると思っています。」
そう言って、何もないカップに口付ける。そこには、確かに新たな湯気が出ている。
「……え？」
「これが、≪神力（ちいと）キャラ≫の真髄れす☆」
（それとこれは違うだろ）
集はその言葉を飲み込んだ。

「……それで、これからの事はわぁかりましたか？」
「まぁ、一応は。理解は余り出来てないけれど。」
取り敢えず、これからの行動をユサギから聞いたが集はいまいち理解がおよんでいない。
「…習うぉり、慣れろです☆」
ユサギは思い切り集の腕を掴むと
「ロぉグインしますぅ。尚、新たな玩具（プレイヤー）をお持ちしましたぁ。同時ロぉグインします」
集に有無言わさずユサギは勝手にゲームログインを終えてしまった。
「これは、ログインとかの必要が無いゲームじゃないのか？」
「あぃ。でも、ゲームから出てきた私のようなキャラは戻る際にはログインという手順を踏めば戻る事は可能です☆」
「結構めんどくさいんだな」
「そう…でしゅね。でも、そうしてでも戻りたいんですよ。私達は

…どんな危険を背負ってでも。＜あの人＞の怒りを買おうとも」
「……ふぅ、ん」
不意に見せたユサギのしっかりとした瞳に思わず、集は目を奪われる
「さて、と。そろそろログイン完了しちゃいますけど…いいんですか？私は全て話しました。これからの行動が危険である事も、全て。それでも、行きますか？」
集は苦笑して。
「そもそも、俺が行きたくないと分かってたら、半ば強制的にログインはしないだろ？」
「あは☆バレてぇました？」
ユサギはにひ、と笑うと
「あ、そう言えば忘れてましたァ？」
集の手の平に安っぽいペンダントを乗せた。それは、集の部屋の何処かで埋まり、時間を無為に過ごしていた物。
「これが？」
「それを、姉様に会ったときに渡してください。それから、全ては…記憶（かんけい）の修復は始まりますから。」
「…分かった。」
集はそれを壊さないように、そっとポケットの中にしまった。
ユサギはその様子にまた、へにゃり、と歳相応の笑顔を浮かべる。
「うんうん☆やっぱり私の目に狂いはぁ、無かったようですね☆」

≪ログイン完了。体のデータ分析開始。同時にデータ移行を開始します。≫

（……あれ？）
集は今聞いたインフォメーションの声に僅かな疑問を感じた。
そして、ユサギを見る。だが、ユサギは
「…さっきから、私の事見すぎでぇすぉ？
あ！？私に気があるとか！？うーむ。困るにゃぁ…」

適当に誤魔化すように、顔を背けてしまった。

≪データ移行、終了します。≫

体にノイズが走る。それが合図だったのか、二人の体は完全に消えた。

対処１０．ゲームログイン（後書き）

何か中途半端で終わってしまってすみません。
でも、この終は仕様なのでｗｗ書き忘れたとかでなないですよ？

対処１１．ログイン終了かーらーのー？

「…わぷっ」
ゲームにログインして、体がノイズ化してすぐ、集は何か柔らかい物の上に落ちた。
続けて、ユサギも落ちてきた。ユサギは慣れているだろうと、集は思っていたが
「ひにゃぁ！！」
集と同じくすっとんきょんな声で落ちてきた。だが、集とは違って場所の把握が直ぐに出来たらしく周りを見回すと、ぽんぽんとスカートを叩くと
「ここは、ゲームの中盤にある村…確か…。」
集は今だぐわんぐわんとする頭を押さえながら
「オートリアス、の事か？」
「そぉそぉ！！そこまで一気に来んだよ。」
立ち上がり、周りを見渡せば、見るからにとてものどかな村の景色。まるでゲームの中に居る事を忘れてしまいそうなほどリアルに、暖かく出来ている。
「さて、ここからはどうするんだ？」
「貴方のゲームの進み具合からして、姉様はここに必ず立ち寄りますぉ。」
「その…ナツメ、だっけか？そいつは自分の意思で動けるんだろ？だったらもう先に行ってしまっているんじゃ？」
「そぉれは無いですよ。あくまでも、姉様の行動はセーブポイントと、ゲームの…しなりお？…それの範囲内でしか動けないんで。」
「えっと、つまり？」
「セーブポイントがある場所と、ゲームの進行で訪れる場所には必ず訪れる事がプレイヤーの原則ですから☆」
ある程度歩いていくと、宿屋の前に煌々と光る蒼色の球体があった。

「あれが、セーブポイント。だから、ここに姉様は訪れます！前にセーブを見た限りでも、ここの少し前のダンジョンからでしたからぁ」
『あら、そこのお二人さん！』
二人が振り向くと、そこには恰幅の良いおばさん。
『ねぇねぇ、あんたたちは旅人かい？』
本当は違うのだが、集とユサギは一度おばさんに背を向けると
（どうする？）
（この際、旅人だと言ってしまった方がぁこれからの事も都合がいいのですぉ。）
「はい。」
ユサギが、にっこり、と演技っぽい笑顔を振りまく。
『あ、あんた…もしかしてユサギ様かい！？』
「はい。どうですか、あれ以降のここは？」
『はい。おかげさまで…。それよりも、こっちの人は？』
「あぁ。私の大切な人を救うために…。私の巫女です。」
『巫女様だったのですか！？いやはや、すみません。』
「いいえ。まだ新米ですのでそう思われても、無理はありません。…それと、敬語はなし、でお願い出来ますか？私は確かに“神力（チート）”の力の加護を受けていますが、それを除けば私もただの人ですから。」
ユサギはふわりと笑う。
（おぉ。すごい演技力）
集はその間、ユサギの演技に関心していた。

「良かったですね☆確保が出来て。」
「まぁ、な」
その日の夜。ユサギにお礼がしたい、と宿屋の店主だったおばさんが言うとユサギは

「でしたら、一日だけでいいのですが…宿に泊めてもらえませんか？生憎と今持ち合わせがありませんが…」
そう言ってうっすらと涙を浮かべたユサギに、おばさんノックアウト☆
そうして、今、タダで宿屋で休ませてもらっている所だ。
「やっぱり、ゲームの進行を蔑ろにしなくて良かったぁ？」
「お前もやっぱりゲームのプレイヤーなのか？」
「え？どうして、ですか？」
ユサギの肩が、びくり、と跳ねる。
「だって、他の人のように決まりきった会話をするでもなし…普通に冗談も言っているし。」
「……あー。えっと。私は、姉様の補佐なので普通の人よりも感情豊かになるように設定されているのですよ！」
「一応、ゲームキャラだと？」
「ぁい。可笑しいですかー？」
ユサギは、びしっ、と手を上げる。
集はそれ以上突っ込んでも上手くはぐらかされる気がしたので、聞く事をやめてベッドに潜り込んだ。
ゲームの筈なのにリアルなベッドの柔らかい感触に、微かに香る柔軟剤のような香りに張っていた気が緩み、うとうと、と睡魔が襲いかかる。
それから完全に眠りに落ちるのに時間はかからなかった。

「……ふぅ。バレなくてよかった」
一人、暗闇の中でユサギが、ぽつり、と呟く。それを聞いているのは光を放つ月のみ。
「私は…うん、いいの。これで…。この道を、選んだから引き返せない。」
暗闇の中に浮かぶ表情は誰にも見えない。月すらも、その様子を伺

い知る事は出来ない。
「……ごめん。にぃ…さん」

「おはぉぉー☆」
次の日の朝。
ユサギはダイナミックに集の眠るベッドに飛びついた。案の定、集から
「ぐぇっ」
押しつぶされたような声が聞こえる。
「お、起きた？朝だよ？今日は姉様と会わなくちゃいけないんだよ！？今日しか会えるチャンスは無いのぉ～。」
「分かったか、ら……取り敢えず、どいて」
「ほい。んしょ…と」
集は起き上がる。乗られた衝撃が効いているのか、肩やらなんやらが痛い。
「んで、何処にいけば…」
ガチャ、とドアが外側から開く。そこには
しっかりとした意思の宿る瞳。それは人とは明らかに違っていた。

「…姉様……？」

その場の空気が凍りついた。

対処１１．ログイン終了かーらーのー？（後書き）

タイトルに深い意味はありません（；＾ω＾）
勢いで付けてみた。

対処１２．ゲームの深淵へ！？

「姉様……？」
ユサギは恐る恐る名前を言う。
「……ユサギ。」
かっ、とヒールの音と共に近寄ってくる。名前の事を指摘しない辺りはその少女はナツメで間違いなかった。
「姉様…？一体どうしたんですか…」

ー……ひゅ……ー

ひやり、と集の喉元に冷たい物が宛てがわれる。それを集は見ずに何かを把握した。
（剣……！？）
ユサギが思わずナツメに飛びつく。
「姉様！？やめて！！」
「…こいつは、誰だ。」
集を見下ろす冷たく、冷えきった瞳に集の背筋に冷や汗が伝う。ユサギの必死な様子に、ナツメは今だ冷えきった瞳を集に向けながら。
「姉様！！剣を降ろしてください！」
「……分かった。」

ー……ひゅ、ん……ー

ナツメは剣をひと振りして、腰に付けた鞘に戻す。
ユサギは集に手を貸す。集はユサギの手を借りて立ち上がる。
「こいつは、誰だ。」
「この人は…、集。……姉様？」
「お前。」

「俺の事か？」
「お前の名前は集というのか？」
「あ、うん…」
ナツメはそれを聞いた途端。

ー……ふわ。…ー

柔らかい微笑みを浮かべた。その微笑みに集も思わず気が緩んでしまう。
「姉様…？」
「あ、え…。どうした、ユサギ。」
「今、とても優しい笑顔をしていましたから」
ユサギの指摘にナツメの頬が見る見るうちに赤くなっていく。
その様子を微笑ましく見ていた集。やがて、ナツメは、わざとらしく
「こほん。」
と咳払いをすると集を見る。それは先までの冷たさは篭っておらず、寧ろ何か懐かしさが篭っていた。
「何だろうか。お前を見ていると何か懐かしく感じるな。今日会った気がしない…集という名前も、何処かで…」
「なら、姉様は何故さっき剣を向けたんですか？」
「あれは…何か違和感というか…この世界とは違う者という感じがして、排除しなければいけないと思っていたんだ。それで、気付いたら…すまなかった」
ナツメが少し頭を下げる。
（あくまで、少しなんだな…）
「いや。気にしなくていいさ。急にこっちに来た俺も悪いんだから。」
ナツメがゆっくりと顔を上げた時。
「……あぁぁぁ！！」

外から聞こえてきたのは、誰かの叫び声。ナツメとユサギは直ぐ様宿屋を飛び出す。集も続けて宿屋を出る。
「……うっ」
思わずむせ返ってしまう程の血の臭い。雲一つ無い青空の広がる朝には相応しくない臭いだった。
「こっちから、か」
その臭いは風にのっているようで、その元は村近くの森からだった。三人はそっちの方へ歩いていく。次第に血の臭いは濃くなり、森に入ってすぐ血の跡も見つかり、三人の警戒は更に強まる。やがて、広い場所に出る。そこが一番強く血の臭いがした。少し進むと、聞こえてくる音。

≪ぐちゅ……がり、ごりごり…ぼと≫

「……あ。」
こっちに向かって投げられたのは、骨。それは、人の腕程の長さでべったりと血と何か透明な液が付いている。かなりの質量のあるそれは腕のようなもの以外にも広場に散らばっている。
足。腕。……そして。
「集。」
ナツメの声が集の意識を戻す。思わず凝視していたそれを隠すように、ナツメが立ち位置を直す。ユサギは素早く周りを見渡して、元凶を見つける。それは禍々しい漆黒と紅の混ざった色で、容姿は只の女の人。だが、手や足にはべったりと血の跡。
「……誰。」
『こんにちは。そっちの彼は、はじめまして。二人は久しぶり。』
流暢な言葉遣い。その声はナツメのようで、ユサギのようで。

「お前を私は知らない。」
すらり、と剣を抜いて構える。
『あら？私は何回も会っているのだけれど…。くすくす。』
「答えろ。お前は誰だ。」
その女性はうっすらと目を細めて、笑った。
『私は……。アサギ。』

対処１３．デフォの戦い、結構過激な件について。

「アサギ……？お前が、だと」
『はい。それについては、間違いありません。』
『アサギ、だという事は事実ですから。』
重なる女性の声。周りを見渡せば、既に何人もの同じ女性が立ち同じ言葉を発している。
『私達は彼女から生まれた分身（アサギ）。』
『彼女（アサギ）の意思は私達（アサギ）の意思。』
「アサギは、もしかして……。」
ユサギがぽつり、と呟く。
『貴方の推測する通りです。清らかなる道標。』
『でも、それを言う事は許さない。』
『彼女（アサギ）の意思を行動に。』
『意思を行動に。』
ゆっくりとアサギ達が、三人に向かって歩を進めていく。
同じ言葉を口々にしながら。
「誰に目的が。私か？」
「それとも、私ですか？」
構えをそのままに、二人は目配せをし、警戒を強める。
『いいえ。違う。』
『私の意思は、違う。』
『貴方に用があるの。一緒に来て。』
す、とアサギ達が同じ人物を指さす。その先には、ユサギとナツメ、その二人に守られるようにいた集。
「あ…俺…？」
『貴方に、用があるの。貴方だけに。』
『それ以外はいらない。必要ない。』
「集に何の用がある。」

「大体、集さんはついさっきゲームにログインしてきたばかりなのに……どうして、＜あの人＞が知っているの！？」
『いいの。それは貴方達が知る必要は無いから。』
『貴方達はもう、おしまい。ここまで、この人を連れてきてくれて、ありがとう。と言っておくわ。』
少しずつアサギ達の言葉に間が生まれる。だが、歩は相変わらずのスピードで。
『ここから、は、私達が…連れていく。貴方、達……終わりに、なる』
「ユサギ、準備！！」
「はい！！」
そう言うと、ユサギは集の足元に陣を形成した。その陣は青々と光、はらはら、と桜とも何とも判別出来ない花弁が舞い落ちる。
その似つかわしくない花弁の景色に、アサギ達は一瞬ながら気をとられる。その一瞬をユサギは、ナツメは見逃さなかった。
「「“花弁月下（オウカサミダレ）”！！」」
「っわぁ！！」
舞い散っていた花弁が一斉に集の周りを取り囲み、小さなフィールドを形成して、そして消えた。
『隠した…。その人、渡して。』
『何処に、隠した。教えて。……私、た、が…怒る、前…に。』
「怒る前に。と言う前にもう怒ってますよね？」
ユサギが、くすくす、と笑い、手に鎖の付いた背丈以上の鎌を持つ。
「それに、私達が簡単に教える訳がない。分かっているだろう？」
ナツメが刀を軽く振り、挑戦的な笑みを浮かべる。
『私達、怒った……もう、いい…。全て、壊、す。』
『こ、わして…奪う！！』
アサギ達が同時に陣を発生させる。そして、同時に走り出す。
「「そうでなくっちゃ。」」
二人の周りに、風が巻き起こる。

「ここ、は…？」
集は周りを見渡す。周りは暗闇で、ただ、陣を形成した時に舞っていた花弁がはらはら、と光を伴って空に踊っている。
「あの、花弁（ハナビラ）の中、なのか…？」
“はじめまして。上南（カミヤ）君。…集（シュウ）君、と言った方がいいのかな？”
暗闇に響く、幼い男の子のような女の子のような声。その声はまるで新しい玩具を見つけたような、喜びに満ちた声。
“あの子達（アサギ）にはあの二人の相手をしてもらおうか。僕は君と話したいんだ。”
「俺はお前の事は知らないし、顔も見せないような相手とは話したくない。」
“…そういう所は相変わらず、だね。まぁ、いいや。”
ぽぅ、と暗闇に灯る小さな光り。
“顔を見せたいんだけど…、生憎と＜僕（ぼく）達＞には顔が無いんだ。そもそもの固有名詞も無いんだけれどもね。だから…”
ぽぅ、と灯っていた光りに輪郭が現れる。そして
“これで、いいかな？ごめんね…。でも、感情は表すことは可能だから”

ゆらゆら、と揺れる光り。微かにその中には何かしらの感情も混ざっている…のだろう。

“さぁ、話そうか？何からお話しようか？”

『…ん、ぐぁ！！』

『い、たい…。また、死んだ！……5人…私（アサギ）、死んだ。』

『許さ、ない…！私（アサギ）……怒る…。』

ひゅん、と鎌をひと振り。ユサギはそれでも、笑みを絶やさない。

「はーふぅ。疲れったぁ…。」

ひゅん、と刀をひと振り。ナツメはそれでも、笑みを絶やさない。

「ふ、この程度で疲れるのか？彼方（ゲンジツ）の方に長く滞在しすぎたか？」

「姉様こそ、彼方（ゲンジツ）に居すぎたせいで口調がヒロインじゃなくなってますよぉ？」

「…そんなに言える気力があるのなら、まだ、いけるよな？」

「あったりまえです！！」

『…あは、ははは。』

『…あはは、はは。』

『…あはははは、は。』

アサギたちが次々に笑う。妖艶に、不気味に。

「なんだ…？」

「分からないです…。でも、何か危険な感じがします。」

「用心するに越したことはないか…。」

ふぉん、と二人の下に陣が形成される。そして、二人に絡み付くように鎖が腕に、足に。

『あ、はははははは…。』

『あはは。分かった、伝わった。』

『彼女（アサギ）の意思、伝わった。』

アサギ達の狂ったような笑いが、森中に木霊する。
響きわたる声に、二人は背筋に冷や汗が伝わるのを感じた。

対処１３．デフォの戦い、結構過激な件について。（後書き）

最初のタイトルにデフォと付いているのは、ゲーム画面で見たら、全てのキャラがデフォされた状態だからでｗｗ
だから、本編で頑張って戦闘してもゲーム画面ではちっこいのがわらわら戦っているようにしか見えないｗｗ

対処１４．超展開！？囚われ姫様は俺ですか！？

『あはは、分かった。彼女の、分かった。』
『彼女の意思、反映させる。』
『彼女、反映させる。』
アサギ達が、一点に集まる。一点に集まったアサギ達は凝縮されて、一人のアサギとなった。
『おーしまい。あはははっはは』
その一人のアサギが手の平の上に小さな毛糸玉を出す。毛糸玉の糸は次第に解けて、少しずつ、二人に近付いてくる。
『これが…、私（アサギ）の……。あはは。』
乾いた笑いが響く。それが全て響き終わった時

ー……ばち、ばちちっ……ー

毛糸の端に灯る光りと同時に鳴る電光の音。
「きょう
ユサギが強化の魔法をかける間際、毛糸が次々に爆ぜた。
強化を施されなかった鎖の結界は容易く爆ぜる毛糸に破れ、二人は地面に派手に転がった。
「あ、ぅっ！！」
「……っ！！」
『……ふ。』
ゆらり、とアサギが近付いてくる。だが、二人は爆発の影響で手が痺れて武器を構え直す事が出来ない。
「……え？」
ユサギは思わず声を漏らす。ナツメはそれが罠かどうかを静かに見極める。

「……それで。」

“君は何も思わないの？今まで＜僕達（ぼく）＞の話を聞いて…”

「別に。大体、顔も未だに見せない奴の言うことは信じられないし。その言った事が仮に合ってるとしても、それは自分自身で本人に、彼女（ナツメ）に聞く。」

集は炎に背を向ける。炎は、ゆらり、と揺らめいた。

“何処に行くの？まだ、話は終わっていないよ？”

「帰る。もう長い間居るだろうし、あの二人なら既に戦いを終えているだろうから。」

“駄目。”

ぐにゃり、と歪んだ炎が集に周りを囲む。炎が周りを囲んでいるのに、熱さは全く感じない。

“君は必要なんだ。＜僕達（ぼく）＞にとって。”

「どういう事…？」

ユサギは思わず己の目を疑った。ナツメもアサギの首元に当てていた刀をゆっくりと下げる。

「……どういう事、だ」

二人の目に映るもの。それは、アサギ。だが。

ー……つ、ぅ……ー

その頬に伝うのは、紛れもない涙。アサギの分身（ウツシミ）である彼女（アサギ）達の頬に伝う涙はとめどなく流れる。アサギはその流れる涙を、その一雫

を手に取った。
『彼女(アサギ)の意思、伝わる。』
『意思が、変わった。彼女(アサギ)の意思が。』
『あぁ……そう、ですか。』
アサギは同時に涙を零す。そして、同時に、その涙を手で拭く。
『彼女(アサギ)の意思、受け取った。』
アサギはその流れた涙を見て、僅かに微笑んだ。
『私(アサギ)にも。私にも、確かに……』
未だに涙を流し、微笑むアサギは、す、と手を差し出す。怪訝な顔をする二人にアサギは屈む。ばさり、と髪が落ちる。
『貴方の願い。届いた…。ありがとう、清らかなる道標。』
「やっぱり…。貴方も…」
「…ユサギ…？」
ナツメが促しても、ユサギは押し黙る。
『それより、も。急いで。<あの人>、あのひ、と』
アサギの体が砂のように、ぼろぼろ、と崩れていく。
『こ、のまま…じゃ、連れて……』
「！！ユサギ！術の解除！」
「えっ！？あ、はい！！」
ユサギが術の陣を消す。しかし、術は解除されず、集も戻ってこない。
「桜花烈火(オウカカギロイ)！！」
ー……ざ、ぁぁぁぁぁぁぁ……ー
桜の花弁が刃のような硬度を持って、術を施した空間を切り裂いていく。そこに出てきたのは、燃え盛る透き通る炎の壁。
“あぁ。もうお迎えが来ちゃったんだ”

声が少し残念がり、光りも、ゆらゆら、とその光りを弱めていく。
やっと、これでこの空間から別れられる。
そう、集は思い、安堵の吐息を零した。だが、その安堵は次の声で微塵も無く、ぶち壊される。

“なら、場所を変えようか？何処がいい？”

「……は？」
事態に追い付けない集を他所に、声に嬉しさが戻ってくる。

“そうだ！君を攫って、あの二人に＜僕達（ぼく）＞のお城まで来てもらおう！”

さらり、と告げられた誘拐宣言。集は背筋に冷や汗が、つぅ、と伝うのを感じる。しかし、気付かない振りをした。
「はぁ…。もういい。俺は帰る」

“あぁ。見てもらおうかぁ…。”

炎に間が出来た。そこからは、日の光りが差し込んでいる。集はそこが出口だと信じて、そこに走り出す。そこまでの距離は無く、直ぐに
たどり着いた。

ー……ばんっ……ばん、ばんっー

「……は…？なんで…」
日は差し込んでいるのに、まるで見えない壁があるかのようにその先へと進めない。

“ねぇ。見えるかな？二人の姿が”

「姉様！あれ……！」
「！！」
透き通る炎にほんの少し間があり、ユサギとナツメそこを覗き込むと見えたのは。

「ユサギ！ナツメ！！」
集は二人の名前を叫ぶ。しかし、二人には聞こえてはいないようだ。二人も必死に見えない壁を叩いている。
“さて、と。舞台も、役者も揃ったね☆始めようか、ゲームのはじまりぃ……を”

炎が、ごぉ、と勢いを増して集の周りを縮めていく。さっきまで無かった炎の熱さが肌に突き刺さる。
「…いたっ！」
ちくり、と何かが刺さった感触がした。腕を見ると、赤い血が、つぅ、と流れて手に伝い、落ちていく。
“痛い？ねぇねぇ、痛い？ゲームでは痛覚は感じないと思ってたぁ？”

そう声が、けらけら、と笑う。その間にも、炎は狭まり、炎からたまに飛び出してくる刃は集に襲いかかってくる。
助けを呼びたくても、聞こえない。
大声で叫びたくても、声が出ない。

それ程までに、集の精神は疲弊していった。襲いかかる刃にも、次々に増える傷にも。止めどなく流れる血にも、注意も恐れも感じなくなっている。その疲弊しきった心に入り込む声。

“ねぇねぇ。苦しいんでしょ？あ、違った。苦しいと思えないほど疲れてるんだっけかぁ？”

「……っ、ぅ。」

小さく呻いても、集は何も聞こえない。

それでも、声だけが耳に響いてくる。

“苦しい？痛い？疲れたぁ？なら、思ってよ。帰りたいって。戻りたいってぇ。”

声に思考が流されていく。それもいいか、と思い始める。

ただ、心に思うのは。

（帰りたい……。戻りたい。元、に）

そう、それだけを強く願う。

“きひっ。きひひ……。”

声の何処か壊れたような、嬉しそうな声を聞きながら

（戻、り…たい。……帰、り…た）

集の意識はゆっくりと閉じていった。

対処１４．５番外編！！御アクセスありがとうございますの話。

ナツメ「さて、この話も１２月７日の第１４話で１０００アクセスを突破した…全く、嬉しい限りだ。」
ユサギ「と、いうことで。今回は番外編としましてー、キャラ紹介やら、裏話やらなんやらをしても良いらしいのでー、それをやっていきたいと思っていまーすっと。」

ーパンパカパーん…ー

ナツメ「安っぽいファンファーレが終わった所で、早速始めようか。」
ユサギ「先ずは、私達のキャラ紹介（ほそく）をご覧ください☆」

ーナツメ・イゥエ・リスティアート。齢１６。ー
名前の其々に意味がある。
ナツメ…生まれ堕ちた際、最初に愛情を与えてくれた人が付けてくれた名。愛情の真名を持つ神の名でもある。
イゥエ…ミドルネーム。ナツメの母親の名前、イゥエネスティアから愛の印にと与えられた。意味は、希望の雫。
リスティアート…神と同等の、もしくはそれ以上の“神力（チート）”の力を有する者に与えられる称号のようなもの。意味は、全てを繋ぐ。

集「こうして見ると、ナツメの名前って長いなぁ、とか思ってたけれど…」
ナツメ「それが？長いのは確かだが。」
集「いや、いい名前だなって。」

ナツメ「……ふん／／／」

ーユサギ。齢１３。ー
世界に生まれ堕ちたナツメ以外の子の中で、最も強い霊力を有し、聖女として人々から慕われ、崇められていた。
しかし、あくまで崇める範囲の中で慕われていたので人からの愛情に飢えている。なので、自分は人とは違う存在だと過剰意識してしまい、人と接する事を極端に嫌っていた。しかし、ナツメと出会って自分が普通の人と何も変わらない事を知って感情を出すようになった。

ナツメ「私よりも設定が細かい気がするんだが（怒）」
ユサギ「そりゃぁ…一応のキーキャラでしたから☆」
集「でした？過去形になってるぞ」
ユサギ「はい☆今ではキーキャラも変わってしまいましたぁしね☆」
集「誰だ？今のキーキャラって？？」
ユサギ「……（；＾ω＾）」

ー上南集（カミヤシュウ）。齢１８。ー
三年間、自宅警備員（ニート）を続けていた少年。実は、かなり頭の回転が良い。いい知恵が働くこともあれば、悪知恵が働くこともある。

集「ちょっと待て。俺の設定、少なくねぇか？」
ナツメ「それは当たり前だろう。」
ユサギ「当たり前ですねぇ。」

ーアサギ・リヴェリアス。齢１９。ー
アサギもナツメ同様に、名前に意味が込められている。
アサギ…生まれ堕ち、誰にも愛を与えられず＜堕落者＞となった者

に与えられる称号。
リヴェリアス…アサギの名よりも深く闇に堕ちた者が得られる称号であり、尚且つ闇の力を振るう資格をも得られる。

ユサギ「要は、典型的な敵キャラということですね☆」
アサギ「うぐっ。」
集「今、何か聞こえた気が？」
ユサギ「気のせいです（＊´∀｀＊）」
“そして、遂に<僕達(ぼく)>の紹介ｗ（ｒｙ”
ばしっ。どごっ。めきゃり☆

集「ん？また何かいたような……。」
ユサギ「番外編の平和は守りました（ｘ・ω・´）」
ナツメ「Σｄ（ー｀ー）」
集「？」
ナツメ「ごほん。これでキャラ紹介(ほそく)は終わったな。さて、次だ。次は…」
ユサギ「裏話ですねー☆」
がささ。
ユサギ「作者から裏話を聞いてきたので、テロップも交えて～どぞ☆」

ユサギ「裏話その1ぃ～☆『この作品も、もう一つの作品もそうですけど…最後はどうなるか、分かりません（；＾ω＾）』…との事です。」
ナツメ「私の方にもう一枚あるが…『と、いうのも。プロットとか書くのが大変で、大体は見切り発車なタイプなのでｗｗでも、全部

考えていないという訳ではなく…二三話はある程度は考えていますよ（；＾ω＾）』だと。」
ユサギ「つまり、これからの私達の扱いも作者の気まぐれ次第ですねぇ…（＃＾ω＾）」
ナツメ「はぁ…。ある程度考えているのが唯一の救いだな。」
ユサギ「裏話その2ぃ～☆『キャラのモデルは、断言します。リア友です（、・ω・´；）周りのリア友は良いモデルになりますｗｗ本人には内緒ですがｗｗ』ですって。」
ナツメ「因みに『モデルと言っても、全員ではないですよｗｗナツメはオリジナルですしｗ声しか出ていない＜あれ＞もオリジナルですからｗ＜あれ＞が友達だったら、絶対に嫌です（、・ω・´）』……ということは、ユサギは誰かモデルがいるんだな。」
ユサギ「……えぇー…。」
ナツメ「さて裏話その3。これが最後のようだな」
ユサギ「……これは…。えいっ」
びりり。びぃぃぃー。
ナツメ「ユサギ、どうした？」
ユサギ「ネタバレの裏話だったので皆様（どくしゃさま）には見せられません（＊´∀、＊；）」
ナツメ「…そうか。分かった」
ユサギ「あ、もう一枚。えっと『大体の更新時間は、夕方なら18時。夜なら、22時から0時の間に予約投稿をしています。』との事です。」
ナツメ「どうでもいいな。」
ユサギ「どうでもいいですね。」

ユサギ「さて、長かったこの番外編もおしまいです☆どーでしたかー？」
ナツメ「最後はぐだっていたがな。」

集「まぁ、突然の事だったから仕方がないな。」
ユサギ「と、いうことで次は本編でお会いしましょう☆」
ナツメ「またシリアスに戻るがな。」
集「……（´Д`）ハァ…」

ナツメ「それでは、また。」
ユサギ「それじゃあねぇ～☆」
集「…本編で、お会いしましょう…。」

対処１４．５番外編！！御アクセスありがとうございますの話。（後書き）

・・・・何かすみません。
せっかくの４桁だったので、調子に乗りましたｗｗ後悔しないです（、・ω・，）書いていて楽しかったです！！ナツメ、ユサギが言っていた裏話はネタではなくて、マジの裏話です（（（（（；゜Д゜）））） 反応が怖い…。

対処１５．ラスボスの暇＝一気にジャンプｗｗ

「え……？」
ユサギのあっけらかんな声が聞こえる。
「…どういう事だ？」
ナツメも続けて、状況を理解する。
透き通る炎が消えた後、あの空間に向かった二人の目に入ってきたのは、何もない、ただ花弁が舞う暗闇。
そこにいた集の姿は何処にもいない。
「もしかして、＜あの人＞に……？」
「くそっ！」
ち、と舌打ちをしたナツメは自分の足元に落ちていた何かを拾う。
それは、安っぽいペンダント。祭の夜店で売っていそうなペンダントを。
「それは……集さんの…」
「アイツの…？」
暗闇の中でも存在感を示すそれからナツメは目が離せなかった。声が響くまで。
“こぉんにちはーっ☆”
「「！？」」
光りが、ぽぅ、と現れてゆらゆらと揺れる。
「貴方が、集さんを…？」
“むぅ。言いがかりはやめて欲しいなぁ。＜僕達（ぼく）＞は助けてあげたんだよ。寧ろ、感謝して欲しいなぁ”

「感謝、だと…！」
ナツメの声に怒気が混ざり、刀を握る手が強くなる。
“彼は疲れきっていたから、＜僕達＞のお城に運んであげたんだよ？”
「疲れきってしまうような事をしたのは、貴方ですよね？」
ユサギも鎌を握り締めて、構える。
“君たち、彼の事が心配っぽいからぁ…会わせてあげる？”
炎が暗闇の中に地図を映し出す。それは複雑に入り組む構造をしている。
“それが、＜僕達＞のお城への地図。ちょっと複雑だし、雑だけれど…まぁ、頑張って☆”
炎が、ふ、と消えて微弱な光りを発する地図がナツメの手に落ちる。
「姉様……。」
「あぁ、ここまでお膳立てをしてくれているんだ。行かない訳がない」
空間を解除して、森に戻ると
「あ、れ……？」
アサギは消えていた。
“くすくす…。あの二人は本当に飽きない。”
部屋に響くあの声。

ー……ぎし…ー

ゆっくりと、ベッドに座る。眠り続けている主を起こさないように。
ベッドの主は、集。
「……。」
何か譫言を呻く事も無く、寝息をたてる事も無く。
ただ、何かを拒絶するかのように昏々と眠り続けて約三日。
まるで、眠り姫のよう。

“まぁ、姫に見えない事も…。”

声に笑いが含む。ベッドに腰掛ける声の主は冷たい集の手をそっと触る。声の主はまたゆっくりとベッドから離れる。

“さて、と…。次のアクションを起こしますか。”

ぱちり、と指を鳴らせば

ー……ふぉ、ん……ー

アサギが膝をついて、畏まっていた。声は、楽しそうに。

“あの二人をある程度…そうだなぁ…冥界門番(ケルベロス)の寝床ぐらいまでぇ、ワープさせてくれればいいや。頼んだよ?”

「……はい。」
声の主は思い出した、というように、ぱちん、とと指を鳴らして
「……っ、ひぅ…!!」
ぐい、とアサギの顔を近付ける。アサギの表情は恐れで歪んでいる。

“もし、あの二人に情けとか…。助けたりしたら、容赦しないから？”

にこり、と嗤う微笑みに、アサギはがたがたと体を震わせる。その様子に満足して、顔を離す。

アサギは、それでもガタガタと僅かに震えていた。

“それじゃ、よろしくね☆”

「は、いっ……。」

アサギが震える声で、そう言うと

ー……ふぁ、ん……ー

夜のように漆黒の黒の光りの筋となって消えた。

ベッドの主は、戻らない。今だ、昏々と。

集がいなくなって、三日。

二人は直ぐに村を発ち、道のりを急いだ。アイテムも補充せず、途中の村に寄ることもなく。

そんな無茶をしていけば、体の体調が悪くなるのが至極最もで。

実際、ナツメの顔色が日が経つにつれて青くなっている。

ユサギが

「姉様。一回、何処かで休まないとっ……！」

そう言って、制止をかけても。

「大丈夫だ。先を急ぐぞ。」

ナツメは頑としてそれを聞き入れない。ユサギはナツメの頑固さを、知っているため、強く言っても効果は無い事は分かっている。

だから、ユサギはナツメの少し後ろを歩き、ナツメの体調を気にかける。
「姉様……っ？」
ナツメの歩みが止まって、ユサギはナツメにぶつかった。
「……。」
ナツメからは、膨大な怒気と殺意が溢れ出す。ユサギが後ろから、ひょこ、と顔を出すと
「…こんにちは。」
アサギが少し疲れた顔で微笑む。
「何の用だ？」
「貴方達を、城まで連れてくるように…との事です。」
「どうして、そんな事をいきなり…。」
ユサギも、鎌を出して構える。
「このまま、のらりくらり来るのも退屈だから…だそうです。」
「…っ、う……」
「姉様！？」
ナツメの体が不意に、ぐらり、と揺れる。
「…どうする？一緒に来る？」
ナツメは刀を支えに、立つ。
「行くに…っ決まっている……！！」
アサギは、悲しそうな、嬉しそうな、そんな感情が混ぜられた微笑みで
「分かりました。」
二人の足元に黒の陣が浮かび上がる。
それが強く光りを放った時、二人は消えた。

対処１６．ラスボス城はチートだらけｗｗ

「っ……。」
黒の光りが周りに流れる。その中、アサギは只、流れる光りを感動も何も思わないまま見つめる。
漆黒の黒がそのまま自分を染めてくれればいいのに。
そう、アサギは思いそして願った。
中途半端に黒に、闇に染まった自分を自己嫌悪する。と、同時にあの時、その手をしっかりと握っていれば。
あの時、その手を離してしまわなければ…。
そんな後悔ばかりが胸に去来して、締め付ける。
ふ、と横を見ればナツメとユサギが気を失っている状態で、自分と同じくゆっくりと落下している。気を失っているのは、自分が転移（ワープ）させたと同時にそういう魔法をかけたから。
「……何を、今更。後悔も、過去も、何もかもを捨ててここまで堕ちてきた。」
自嘲するように、く、と嗤う。次第に、光りが散り散りになり視界が開けてくる。

「……っ！！は、ぁっ……。はぁ、はぁ。」
長い間眠り続けていた集が額を汗ばませて、目を覚ます。
周りを見渡してみれば、そこはまるで最上級ホテルのスィートルームであるかのようにきっちりと手入れされているアンティークの数々が目に入る。起き上がろうとすれば、腕に力が入らずベッドに戻ってしまう。
「……いたっ。」
力の入らない腕を見れば、ほぼ全体に包帯が巻かれている。しかも、

その箇所は全てあの刃に付けられた傷があった場所。
「どういう事だ…。」
“あぁ、やっと目を覚ましたんだね。”

「う……っ！！」
ユサギが意識を覚醒させると、ナツメが暗闇に向かって魔法を放っていた。そして、暗闇から
ー……おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ…ー
耳を劈(つんざ)くような咆哮。その唸り声を聞いて、ユサギは暗闇の中に居るものを推測、看破した。
「まさか、冥界門番(ケルベロス)っ！？」
「ユサギっ！！避けろ！！」
ナツメの切羽詰まった声にユサギは直ぐ様横に飛び退く。その瞬間。
ーおおぉぉぉっぉおおぉぉぉぉ！！ー

「あ、がっ……！！」
「姉様！！」
ユサギは素早く陣を発動させる。
「“護花(ケンカ)”っ！」
ユサギが当初いた場所の壁に叩きつけられそうだったナツメを睡蓮の華が優しく受け止め、同時にある程度の傷を癒す。
「ありがとう。」
「姉様…。これは一体！？」
「アイツにしてやられた！！ここは冥界門番(ケルベロス)の寝床だ！！」

「じゃあ、あの咆哮は、冥界門番(ケルベロス)のっ…」

ー……うぉぉぉぉぉ、おぉぉぉぉぉぉぉ…ー

ゆっくりと地響きを鳴らしながら、冥界門番(ケルベロス)が姿を白日に晒す。全身を漆黒の毛で覆われ、ギラギラと赤い目を光らせる様子はゲームであっても恐れを感じさせる程にリアルで。

「ユサギ、来るぞ！！」

「はいっ！」

“おはよう。体は大丈夫？かなり眠っていたみたいだけれど。”

声にいつもの、何処か楽しそうな感じは読み取れない。その事に集は何処か違和感を感じた。

「どうするつもり、だ？俺を。」

“どうするも何も…。只、君を返してあげようかなって”

「何も企みがある？俺をこんな事にしても、何もメリットはないぞ。」

“そうだね。全く、何を考えているんだろうね…。”

集が起きてから感じていた違和感。それは、声。

「お前、誰だ…。」

“私？私は、＜僕(ぼく)達＞貴方が今まで会った人のもう一人の人格。”

声の主が暗闇から、月の光りの届く所へと歩む。

「……。」
アサギは只、冥界門番(ケルベロス)と対峙する二人を冥界門番(ケルベロス)の背から見ていた。
元々、冥界門番(ケルベロス)はゲーム上ではアサギの祖先が創り出した物なので、唯我独尊の冥界門番(ケルベロス)もアサギには懐き、また言うことも聞く。そのため、背に乗っていても振り落とされる心配が無い。
（……あいつ、もしかして…。）
アサギが開戦当初から感じていたナツメの違和感。戦いの剣にブレは見えない。否、ブレないように無理しているのだとアサギは看破した。
（だから、さっきの冥界門番(ケルベロス)の一撃も避けられずに吹っ飛ばされて…。）
勿論、相手の具合が悪かったとしても、アサギには関係ない。アサギは、それでも早急に止めをさす事はせず、様子見の状態で留まっている。勿論、止めをさす気も更々無いのだが。
「冥界門番(ケルベロス)。ターゲット、アタック。」
ー…おぉぉぉぉぉぉっぉっぉぉぉぉ…ー
冥界門番(ケルベロス)がナツメに思い切り、腕を振り下ろす。
“ま、そんな事今は関係ないわね。さて、まだ<僕達(わたし)>の意識が主導権(シアチブ)を握っている間に…。”
声の主はきらきらと輝く髪を揺らしながら、集の腕を軽く引っ張る。
それでも、腕は離れないかのように力が篭らず、だらん、と下がる。

“ふぅ…。困ったな。余り力を使っちゃうと＜僕達（わたし）＞の事を勘づかれるかも…。”

すらり、とした白い腕が集の腕に、足に陣を灯していく。

「これ、は…？」

“＜僕達（わたし）＞の意識が保たれる間だけ、貴方の力を戻してあげる。さ、早くここから……。”

腕を掴む白い腕を、集は払った。少し悲しそうな顔で、声の主は腕を引っ込める。

「お前は本当に誰なんだ。どうして……どうしてっ…！！」

“…君にだけ、教えてあげる。＜僕達（わたし）＞と＜僕達（ぼく）＞の事を。”

「姉様！！」

ユサギの叫びに近い声が響きわたる。

「……っ」

叫ぶ事もままならないまま、ナツメは横凪ぎに吹っ飛ばされる。壁に激突して、そのまま崩れる。

（やっぱり……。）

ナツメの体調は悪化の一途を辿っていた。顔からは、血の気が引いていたし、体もガクガクと小刻みに震えている。剣無しでは体も支えられない程に。

「……“桜花散々（オウカチリバミ）”…」

最後の魔法を唱えると同時に、ナツメは意識を手放した。

その魔法も冥界門（ケルベロス）番の前では只のお遊び。桜の刃は軽く弾かれて。

ー……おぉぉぉぉ…ー

唐突に、冥界門番（ケルベロス）の動きが止まった。

対処17．ラスボスの中の瞳。

「止まれ。」
アサギが冥界門番（ケルベロス）にそう命じると、冥界門番（ケルベロス）は犬のように座り込んだ。
「……何？」
ユサギが、ひゅ、と鎌を振り、牽制する。
「……。」
アサギは無言で倒れているナツメに近付くと、ナツメを膝枕する。
「…光護安息（コウゴキュウメイ）」
ぽう、とナツメの全身に光りが走り、ナツメの顔色が僅かながら回復する。
「貴方、一体……。」
「…私は、同じ人を傷付けてはいけないと…思ったから。」
ぽつり、と呟く。
「…貴方も、やっぱり。」
確信めいたユサギに、アサギは見えないように微笑む。
「私は……人間（プレイヤー）の一人」

“この階段を一気に降りていけば、あの二人の居る所が見える場所に出るわ。でも、きっと何かを差し向けられているはず…気を付けてね。”

「あ、でも……。」
集は後ろを、暗闇に微笑む声を振り向く。
声は少し前に出ると、集の頬に手が触れる。その手は驚いて、身を引いてしまう程冷たく、そして、その奥には暖かさがあった。

「…俺が行ってしまったら、お前はどうなるんだ。…お前が言う“僕達(ぼく)”に…」

“それは、私達(わたし)の問題。貴方が、そして<あの子>も考える必要は無いわ。”

するり、と手が集の頬から離れる。そして、その代わりとばかりに暗闇から声の主が顔を見せる。

“さぁ、早く行きなさい。まだ押さえ込めているうちに。加護が続いている間に…。”

ふわり、と何処か安心するような微笑みに集は再び歩み始める。

最後に、と後ろを振り返れば

“最期に、ゲームの中であっても…。貴方と再び会えて、良かった。”

「かあ、さん……？」

後ろ髪を引かれながら、集は階段を降りていった。

幼き頃に見た母親の面影を、先程の微笑みに重ねながら。

“全く、何時まで経っても…変わらないんだから。”

すぅ、と意識が薄らいでいく。

“でも、あの子達は…光。きっと、貴方の闇も照らすわ。”

瞳をゆっくりと閉じていく。自分の時間が終わる。

“……さようなら。”

「このゲームは、古い機種だが…ネットゲームとしても接続は可能なんだ。」

ナツメの回復を待っている間、ぽつり、とアサギがユサギに話しかける。

「…ネットから、貴方はここへ？でも、あの事件の時にやって来たにしては……。」

「人間（プレイヤー）の気が感じられない、か？」

こくり、とユサギが頷く。その正直に、アサギは苦笑する。

「あぁ、そうだろうな。私はこの世界に留まりすぎている。」

「何時から…？」

ぎゅ、とアサギの手に力が篭る。

「最初…。かなり、初めの方だったかな……自分でネット接続をした」

「どうして、そこまで……。」

二人の間に僅かながら生まれる沈黙。その沈黙を破ったのは

「……う、ぁ」

ナツメが苦しげに声を上げる。

「姉様！！」

「…回復したか」

す、とアサギが立ち上がる。すかさず、ナツメは追撃するために刀を構える。だが、ユサギに押し留めるように説得されて、渋々、刀を鞘に戻した。

「貴方は、これからどうするの？」

「…お前達を助けてしまったから、＜あの人＞から何かしらのアクションはあるだろう…。全部、私の問題だから。」

「待て。」
「姉様…？」
「全部、聞こえていた。その上で、一つ、聞かせて欲しい。」
ナツメは立ち上がる。アサギは、無視せずに立ち止まり、ナツメの次の言葉を待った。
「お前は、ゲームのキャラの……男がお前なのか？それとも」
「今が、本当の私の姿。男の姿は、単にゲームのシナリオ上で必要だっただけ。」
アサギはそれだけを言うと、冥界門番（ケルベロス）に何かを呟いて、さっさと何処かへと行ってしまった。
「……アイツは、アイツも…。」
「姉様…。酷な事かもしれませんが…」
「あぁ、集を探しに行こう。」

“アイツ…！！何なんだ！！勝手に意識を乗っ取って！！”
荒れた声は、長きにわたる階段をひたすら降りていた集の耳に確かに届いた。しかし、　声の大きさ、木霊からして、距離はまだ遠いかに思えた。
「……早く…っ」
体中を駆け巡る痛みに集は蹲り、顔を苦痛に歪ませた。
それは、加護が消えつつあるという事。
足がガクガクと震えて、力が入らない。
「……痛っ。」
唐突に、足に走った鋭い痛み。加護が消えていく痛みではなく、しっかりと、質量が重くのしかかっている。
「あ……ぃ、う…」
後ろに立てかけてあった筈の騎士の鎧が倒れ、足にのしかかってい

る。動かそうとしても、騎士の鎧は重く、そっとやちょっとでは動かない。それでも、足音は、苛立ちの音は近くなっていく。

“こっちか……。きっひひひ”

「……っ。」

慌てて息を殺す。そして、心の中で祈る。来ないように、と。

（……ナ、ツメっ…）

「…ここにいたか。全く。」

（……え？）

ふ、と顔を上げるとそこには、にんまりと笑っていたナツメが集を見下ろしていた。

「どうして、ここが分かったんだ？」

恐る恐る聞いてみる。ナツメはその様子に口を押さえて、笑いを堪える。

「…くくくっ。まぁ、その話はこれが終わってからにしよう。」

ナツメはそう言うと、集の後ろの暗闇に視線を投げかける。

「なぁ、そうだろう？」

“……きひ、ひひっ。……”

暗闇の声はにやり、と口を弧を描いた。

対処18．ボスと勇者と時々モブ

「さて、漸(ヨウヤ)くシナリオ通りの役者が揃った。」
ナツメの相変わらずの挑戦的な微笑みが、集には酷く安心感を感じさせた。すらり、と伸びる刀も頼もしい。
何気にナツメは集の前に、守るように立つ。
“…冥界門番(ケルベロス)は、どうしたのさ。”
「さぁな?そこは、確かめてみれ」
ふっ、とナツメが姿を消す。集が姿を探そうとした瞬間。
「っっば!!」
ナツメの刀が暗闇を一閃した。暗闇の中にいたはずの声の主は
“あー、危なかった。それにしても、冥界門番(ケルベロス)を倒す事がこの短時間で……。”
いつの間にか、二人の後ろの新たな闇にいた。
「いい事を教えてやろうか?」
また、ひゅ、と刀を振る。刀身には輝く白銀の光が纏う。
「お前は、一人だ。」
“……っ!!!!”
声の主の気配に怒りが、同時に嬉しさが吹き出る。
「そんな事より、楽しもうじゃないか。折角のサシなのだから、な。」
ナツメは集の後ろの鎧を刀で一閃、排除すると立ち上がらせた。
「そのまま後ろの階段を突っ走れ。」

「後ろの階段……。でも、来た道を戻る事に」
「いいから。」
集の背中を、どん、と押すとナツメは微笑みをそのままに刀身を暗闇に突きつけた。
集は戸惑いながらも階段を上がっていった。
僅かな沈黙の後。
「…そろそろ、姿を見せてもいいんじゃないか？私はもう分かっている。お前が＜誰の姿＞を使っているのかを。」
“ふぅ、ん…。ま、いいや。いいよ”
ゆっくりと暗闇が明るくなっていく。声の主の姿が現れる。
「やっぱり、な。まぁ、それでも私のやることに関係ない。」
“そうだと、思う？”
声の主は、漆黒の髪のアサギだった。

「はぁ……。はぁ…。っ痛！！」
鎧を退けて直ぐ足を動かしたため、足の怪我が開き、酷く痛みがはしる。足からは血が滴り落ちる。
「まだ……っ」
「はーい☆お待たせしましたぁ。やっと追いつきましたぁぁ……。」
「ユサギ！！と……？」
ユサギは大きな犬のような物に跨って、集を見下ろしている。
「これ……！！冥界門番（ケルベロス）っ……！？」
「あれ？かなり終盤の敵ボスの筈なんだけど？？」
「あぁ、ゲームマニアの俺をなめるなよ。これぐらいの物は基本知識だぞ。」
「ゲーマニ……詰まり、ヲタクだぬぇ？」
「うぐっ」

ユサギは冥界門番(ケルベロス)から降りる。
「姉様は…？」
「この先にいる。今は戦っている。」
「そう、ですか。貴方は先にここから脱出して……」
「俺も行く。…足でまといにはならないようにするから、だから。」
ユサギは集の決意に満ちた目を真っ直ぐに見ると
「では、乗ってください。この子は強いですぅしね☆」
再び冥界門番(ケルベロス)に跨ると、集に手を差し出した。
顔を逸らしながら、集はその手を取り、冥界門番(ケルベロス)に乗った。冥界門番(ケルベロス)は嘶(イナナ)く。
「今まで＜あの人＞は姉様を躱し続けてきたけれど、もう限界の筈。ここで姉様は全ての決着をつけるつもりです！！」

「氷山茶花(ヒョウザンカ)！！」
氷が渦となって所々凍らしていく。それでも、＜アサギ＞はひらり、と躱していく。ただ、それの繰り返しで自分から攻撃を仕掛けてくる事はない。それがナツメは疑問だった。
「どうして、こない？それ程までにお前は弱かったか？」
“いや。切り札は最後までとっておくものだと思ってぇ☆”
「これでも、そんな事言えるか？」
ナツメは大きく飛び上がり、＜アサギ＞を見下ろす。
「お前に、一つ、クイズといこうか？」
ぱち、と何処かで何かが弾ける音。
「時には潤う恵みとなり、時には生命を奪う凶器となる。人の摂取する飲食物のほぼ全てに含まれている。大量に摂取し、その状態を放置しておけば死亡する。」
“……それが？”
「分からないか？なら、答え合せといこうか」
ぱちん、と音が多くなり、数も増えていく。

「……ジハイドロジェンモノキサイド。」

「！！待って」
ユサギが冥界門番（ケルベロス）を止める。その先には、何か透明な壁がある。それに触れてみると

ー……とぷ、ん……ー

手が壁の中に沈んだ。手を抜いてみると濡れている。
「これは……？」

“ジハイドロジェンモノキサイド……？”
「分からないか？」
す、とナツメは手を開く。手には何かしらの液体が滴り落ちている。
「漢字表記にしようか？……一酸化二水素。」
ぱち、んと音が止む。
「つまり……。」

「水……？」
ユサギが壁を構成するものを推測する。
「どちらにしても、この壁はさっきまで無かった。…そうですよね」
「あぁ。俺はここから出てきたからな。」
「ということは、姉様がこの壁を創ったのでしょう。」
集は冥界門番（ケルベロス）から降りると、再び水の壁に手を付ける。
「アイツが創ったということは危害を加えるものじゃない。」
「えぇ……。」
「なら、ここを通る事も出来るよな？」

ユサギは集の提案に驚き、しかし、その提案を排除することはしなかった。それだけ、集にもナツメにも信頼を寄せていたということだから。
「……ここで待っていて。」
ユサギは冥界門番（ケルベロス）の頭を撫で、集と同じように降りる。
「……さて、行く前に。」
ユサギは集に魔法をかける。魔法は、すぅ、と集の体を通る。
「ゲームとはいえ、一応の保険としてこれを」
「……よし。通るぞ」
とぷ、と集とユサギは水の壁に身を委ねた。

“一酸化二水素…。H2O…！？”
＜アサギ＞はいつの間にか自分の周りに水が満ちている事に気付いた。その水は膝までの高さにまで満ちていた。
「ご明答。ジハイドロジェンモノキサイドは水。」
“…っお前にそのような力（チート）は無い筈っ！！”
「口調が変になってるぞ。まぁ、この力（チート）の使い方を知ったのはつい最近だからな。」
“……壊す。壊して、君を永遠に玩具（ゆうしゃ）にしてあげるぅぅ…！！”
「…お別れだ。」
ナツメは、少しずつ満たされ始めていた水量を一気に増やす。増えた水は津波となって＜アサギ＞を飲み込む。
＜アサギ＞は特に抵抗する事なく、水に飲まれた。

対処１９．最終決戦！？はド派手に！！

水の壁を抜けた二人はナツメを見つける。ナツメは水面に僅かに足を浸けて、波紋が浮かぶのを只、静かに見ている。
ナツメの水面の下には、＜アサギ＞が上のナツメを見上げている。特に騒ぐことも無く、此方も静かに。
「姉様！！」
「…あぁ、二人共無事だったのか」
す、と水面から足を離すと水面の波紋は赤くなっていく。
「何をするんだ？」
「コイツを倒して、ゲームはクリアーだろ？だから、倒すんだよ。」
広がる波紋は水に沈んで、＜アサギ＞の身を締め付ける。
「爆ぜて消えろ。“神炎尾（カギロイ）”」
周りを満たしていた水が一瞬にして赤く、血のように染まる。
その水は、蒸発していく。
「……爆ぜる。」

ー……ぼぉぅぅ……ー

水が一気に消失、炎へと変わった。炎は＜アサギ＞を包み込み、轟々と燃える。その様子を、ナツメは水の中から二人を引き上げながら見守る。
「…意外と呆気ない、な。」
ばちばち、と燃え盛る炎を眼下に見ながら集は言う。
「……これで、終わったらいいけれど。」
ぽつり、とユサギは集にしか聞こえない声で呟いた。それを集が聞き返そうとしようとした時。

ー……ばひゅっ！！……ー

集の体が炎から出てきた何かに思い切り引っ張られ、炎の中に引きずり込まれる。ナツメが助けようと、炎に突っ込む。
「…っうわ！！」
ユサギはいきなり勢いの強くなった熱波に当たり、思わず顔を手で押さえた。それから直ぐにナツメが炎から弾き飛ばされる。
「姉様！？彼は…！？」
「っち。しくじったアイツはまだ倒れていない！！」
かしゃん、と刀を素早く手に持つと
「……っはぁぁ！！」
大量の水を流し、炎を一気に押し流す。炎から現れたのは、飄々とした表情の＜アサギ＞と
「……っう、ぅく」
首を持ち上げられている集が苦しそうに呻いていた。
“あはは。こんなちっぽけな水と炎で、倒せると思ってたぁ？そんな簡単じゃないよ＜僕達＞はぁ☆”
ぎり、とナツメの手に力が篭る。
「集さんを離して下さい！！」
ユサギが先制で、＜アサギ＞に鎌を振る。しかし、鎌は空を切り、逆に＜アサギ＞によってさっきのナツメのように吹っ飛ばされる。
「…あっ、いた…っ。」
くらり、と頭を打った影響で脳震盪が起こり意識が揺らぐ。
“ねぇ。”
「っ！！！！」
いつの間にか近くに来ていた＜アサギ＞によって、手首を掴まれる。
“＜僕達＞と君のあの事。忘れたなんて、言わせないぉ？”
「あ…っう…」
ユサギは鎌を落として、しかし、その場を動けないでいた。
“ねぇ……。”
ねっとりとした声がユサギの耳に、頭に響く。

「あ……ぅ…っ。」

「うっ…。」
頭の痛みにナツメは起きる。愛用の刀を持つ利き手からは血が流れ、とてもじゃないが刀を使える程の力は出ない。
仕方なく、ナツメは利き手じゃない方の手で刀を持ち、周りを見渡す。
「ユサギ…？集……！？」
周りを見渡しても、二人の姿は見えず、所々に炎が見えるだけ。
「…姉様…。」
「ユサギ！！」
ナツメがユサギに駆け寄ると

ーひゅ……ー

ナツメの喉元に、鎌が当てられる。ナツメは急いでユサギから離れて、刀を構える。ユサギの様子を伺おうとしても、その瞳からは何も感じない虚無。
「ユサギ…？」
「……覚悟っ。」
次々に振られる鎌にナツメは避ける事しか出来ない。刀を振ろうとしても、ユサギを傷つけたくないという欠片の情がそれを邪魔して、防戦一方だ。
「…どうしたの？何故、反撃してこないの。」
抑揚の無い声で、虚無の瞳で、ユサギは問う。
「それは、こっちの…台詞だっ！！」
「ぁうっ！！」
やっとの思いで鎌を切り返すと、ユサギは派手に転がる。しかし、

鎌は離さない。ナツメは刀をユサギの喉元に突きつけて、制止しようとする。
「ユサギっ……！！」
「…だから？」
手が切れるのも構わず、ユサギは刀の刃を持って、ぐぐ、と押し返す。

「ユ、サギ…！？」
遠くから見ていた集は首を絞められていても尚、叫ぶ。当然ながら、その声は届かない。
「くそっ！！は、なせ！」
「…離したい、よ。」
＜アサギ＞の手の力が弱まり、集は地面に叩きつけられる。
「…助けたい、よ。でも、私…は」
「……？お前、誰だ…？」
「ねぇ…。どうなってるか、知りたいですか。」
「……その口調、……ユサギ？」

「ねぇ、早く攻撃しなよ。どうして、しないの？」
「……。そうか、漸く分かった」
ナツメは刀をユサギの手から引き離す。ユサギは攻撃されないと分かっている為、鎌を持ちながら、くるくると舞っている。
「ほら、早く…。」
くる、と鎌を回して挑発する。ナツメはその様子に僅かに目を細めると
ー……ひゅっ…ー

刀を構えて、ユサギに特攻してきた。その行動を予測していなかったユサギは反射的に鎌で刀を押し返そうとする。が

ー…かしゃん…ー

反射的に返した為、力が上手く入り切らず、鎌は弾き飛ばされる。
「チェックメイト。」
「殺すの…？私を」
「あぁ。」
「どうして？私は…」
「お前は、ユサギじゃない」

「どういう事だ…？」
「私の体は、ここ。あっちにいる私は＜あの人＞。私の姿を複製（コピー）されているから…。」
「お前とアイツに何があるんだ？」
「……それは。」

「あぅぅっ！！」
ユサギが吹き飛ばされ、二人の近くまで転がる。
ナツメはユサギの喉元に再度、刀を当てる。
そして
「チェックメイト。ゲーム終了だ。」
一閃、切る。

対処２０．ゲームの崩壊。

きらきら光る宝石を眺めている。
直ぐに、夢だと分かった。
その宝石を手に取ると、宝石の中に何かが見えた。
凄く、幸せそうな笑顔がそこにはあった。
その、笑顔が散りばめられた宝石を私は粉々に壊した。
粉々になった宝石は、風に吹かれて消えてしまった。
そうしたら、私の記憶にもあったその笑顔が。
やっぱり、同じように粉々になって消えてしまった。思い出すことも出来ない。
宝石を壊せば壊すほど、新たに宝石は何処からか転がってきて。
その宝石にも、やっぱり笑顔が満ち溢れていて。
だから、全て、壊した。

“あ……あぁぁぁぁぁぁぁっ！！……”
ユサギの姿が薄れて、＜アサギ＞の姿に戻る。首からは、とめどなく赤い光が零れては消えていく。＜アサギ＞の叫びが響き渡る。
「これで……？」
ユサギが今だ信じられない、というかの様子でナツメに問う。
「終わり…の筈。」
“……あ、ぁぁ。……ひ、きき…ひひ”
ゆらり、と＜アサギ＞が立ち上がる。首を押さえる手が離れる。手には赤い血がべっとりと付いていて。
“あぁ…。もう、ここはおしまいだ。…残念だなぁ…。折角、色んなギミックとか用意してたのにぃ…”
最後に、きひひっ、と笑うと＜アサギ＞の姿は消えてしまった。

「お、わった……？」
刀の刃をゆっくりと地に降ろしていく。周囲のフィールドが、ぼろぼろ、と音をたてて崩れていく。
「急いでここを出るぞ！！」
「あぁ…！！」
ナツメの後を、二人が走る。冥界門番（ケルベロス）に、ユサギと集が乗り、続けてナツメが乗ろうとした時。
“……君、に…贈り物…を…”
ナツメの足に膨大な数の鎖が巻き付く。鎖に引っ張られるまま、ナツメは滑り落ち、そして床に空いていた黒い水に飲み込まれた。
「ナツメっ！！」
集が飛び降りようとした時。ぐん、とユサギに腕を引っ張られ、尚且つ冥界門番（ケルベロス）の走りに邪魔されて出来なかった。
「ユサギっ……！！」
「……ごめんなさい。」
ぽつり、と呟くユサギの表情は読み取れなかった。

ごぽ、と音をたてて肺に黒い水が入り込む。それでも何故か意識は薄れず、息が出来ないという事はない。
目を開けてみると、黒い水に埋もれずに輝く＜何か＞があった。
それを一つ、手に取る。それは、あの宝石。
夢の中で幾度となく壊した筈の。
“それ……。あげる。君のモノ…きひひ”
それの中にはやっぱり、あの笑顔。愛されて、幸せに満ちる笑顔。
それが堪らなく嫌で、壊そうと力を込める。
“壊させないよ。だって、君のモノ…は＜僕達（ぼく）＞のモノだから、壊しちゃ駄目なんだよ……きひひっ”
壊れない宝石は、私の中に溶けていく。
拒絶は許さない。そう、誰かが言った。

それでも、拒絶したいと誰かが言った。
心に染みる宝石に耐え切れず、私は目を閉じた。

完全に崩れた城を、集は只見る。そして、ナツメが出てくるのをずっと待っている。ユサギは口を固く閉ざしたままで。
「……ぁ。」
ユサギが漏らした声と、視線に注目すると
「…ナ、ツメ！！」
誰かに姫抱きされているナツメが、崩れた城の前の川を渡っていた。
「…！！」
ユサギが鎌を構える。ナツメを抱えていたのは、漆黒の髪の＜アサギ＞だった。＜アサギ＞はナツメを柔らかい草原の上に寝かせる。
「どういう魂胆ですか…。」
“何も、考えてないわ…。只、とても苦しそうで…悲しそうだったから。心配、しないで”
「お前…＜アイツ＞か？」
＜アサギ＞は集に向かって微笑む。
「コイツは、俺を助けてくれたんだ。だから、攻撃される心配も無い」
「そ、うですか。」
今だ警戒を露にしながら、ユサギは鎌を降ろす。
“それより…。ここはもう保てない……早く、ログ、アウト…。”
＜アサギ＞の声に雑音（ノイズ）が目立ち始める。
“この子、も…一緒に……。大丈夫、帰れる…から。”
「強制ログアウトの選択。一斉にログアウトの実行を。」
ユサギがそう言うと、体が少しずつ粒子化していく。周りの背景も崩れ、＜アサギ＞一人だけが暗闇に取り残される。そんな風に集は感じた。だから
「お前も来ないのか？」

“私も？どうして？私はここの住人よ？ここにいる義務がある。”
＜アサギ＞は困ったような微笑みで、集の手をそっと包み込んだ。
その手は恐ろしく冷たかったが、集は振り払わなかった。
集の体は殆どが粒子となり、残っているのは、手と顔位。
“…もっと話したかったな。…ほら、早く還りなさい。”
「お前っは……！！」
“…ごめん。さようなら。”

集達の体が現実世界に行った後、＜アサギ＞は崩壊したゲームのフィールド内を只管歩いていた。フィールド内には、アサギのようにネットワーク接続によってゲームの世界に来、そして何も知らないまま崩壊に巻き込まれていく人間が沢山いた。
“早く、ここから出なさい。…出口は、あっちにあるから…頑張って、走って。何があっても、絶対に振り向かないでね。”
意識が飲み込まれそうになっている人間を何とかしてたたき起こし、出口だという光の方へと背中を押して促す。
出口の方へ向かっていく人間の後ろには、今度こそ崩壊していく世界に引きずり込もうと黒い手が何本も這いずりまわっている。それに捕まれば、流石の＜アサギ＞でも救うことは出来ない。
“これ、で…終わり……か、な？”
暫く無かった雑音が再び声に混じる。体にはボロボロと光が零れ、顔にも時々ブレが生じる。
本体である＜あの人＞から完全に離れる事は不可能。だが、僅かの間だけでも本体から離れる事は可能。その代償がとてつもない疲労と、ざり、と混じる雑音。
“も、う…時間、かな。戻らな、きゃ…”
自分に出来る限りの行動範囲で人間の後押しをすると、人間を取り込まんと伸びる手の前に立ちはだかった。
手は確実に＜アサギ＞の体を侵食し、痛みとして蝕んでいく。

“私……会えて、嬉しかった。”
もう、痛みも何も感じない＜アサギ＞は暗闇の中、崩壊していない壁にもたれ掛かった。
“ありがとう。集。…貴方に、闇をも照らす光が永久に照らさん事を……。”
＜アサギ＞の体は、崩壊する闇に飲み込まれた。

対処２０．ゲームの崩壊。（後書き）

…第一章、終われて良かったです。
まぁ、まだ続くんですがね（；＾ω＾）

対処２１．チートはチートのままでした！？

ゲームの世界から何がなんだか分からないうちに、自分の部屋に戻ってきた。……久しぶりだなぁ。俺視点。
帰ってきて、やっとゆっくりとした生活に戻れると思っていたのに……。
「集さぁん。ここってどうやって進むんでぇすかっ？」
帰ってきて最初のご飯を作っている最中、ユサギがコントローラーの音を鳴らしながら聞いてくる。ユサギが今しているのは、ゲーヲタの中でも難しいと云われているシューティングゲームの攻略を。
（なんでまだ居るんだよ……はぁ。）
「ん～？今、何処まで進んだんだ？」
「えっとぉ……」
ユサギに攻略を教える為に、一度コンロの火を止めて戻る。
その向かう途中、どうしてもベッドが目に入ってしまう。ベッドにはゲームで意識を失ったままのナツメが横たわって眠っている。帰ってきて既に5，6時間は経っているが特に異変は見た限りでは何も分からない。
「なぁ、ユサギ。」
「ぁい？」
「ナツメに、何があったんだ？」
「んぅ～。私にも詳しい事は知らないし、分からないです。でも、何処にも外傷は見当たらないから…でも」
ユサギはコントローラーを置くと、ナツメの眠るベッドに座った。こうして見比べてみると、ナツメとユサギで目に見える違いが一つ。
「ユサギの方が血色が良く見えるけど、それは何か影響してるとか無いのか？」
「え……？私の方が、血色が良い…ですか？」
「うん。」

ユサギがナツメの頬に触れると、直ぐにその手が離れてしまった。
「どした？」
「あ、いえ。……もうすぐで覚めると思います。」
ユサギはそれ以上は喋らず、ゲームに戻った。俺も攻略を教えると
ご飯作りを再開するために、台所に戻った。

宝石がじぶんの周りでくるくると踊っている。
あんなに嫌だったのに今では何も思わない。宝石の中で煌めいてい
た笑顔も、もう見えない。
あぁ。戻らなくちゃ。私はあの、部屋に。

「さて、と。」
軽いご飯…サンドイッチを作り終えると、何とかしてユサギをゲー
ムから引っ張り出す。
「んぅ。……っおいしー！！」
「そりゃ、良かった。」
モグモグとご飯を食べながら、ベッドのナツメを見る。
ぴく、と手の指が動いた気がしたからそのまま見ていると
「……ん、ぁ」
ナツメから少しだけ声がしたから、思わず身を乗り出す。
「……集。」
ナツメの久しぶりの声に集は安堵したが、自分の体勢に後悔した。
ベッドに乗り出してナツメの顔を覗き込んでいる。正に
「…おそおぉと、したな…。」
起きたばかりでられつが上手く回ってはいないが、声に怒気が含ま
れているから…これは
「こぉんにょ……いっふぇん…死んでこぉぉい！！」

あ、やっぱり。
見事なストレートアッパーを喰らって、俺は見事に吹っ飛び、ユサギは
「おぉ～。」
と、パチパチ拍手をしている始末。
（フォローしてくれよ…）
「だいたいおまえはれぇでぃーのねがおをほいほいとみるのがすきなのかこの……ドへんたぁぁいぃ！！」
「いや、違うけど…痛っ。痛いっつーの！！」
ぼすぼす、と枕で殴られる。ナツメの顔が物凄く赤くなっていて、それが余りにも歳相応…いや、もっと幼い感じに見えたから思わず笑ってしまえば。勿論、追加で喰らう訳で。
「それにわたしがねむっているあいだにごはんたべるとかいいこんじょうじゃないかぁぁー…。わたしなんてここのごはんなんてほとんどたべてないのだがぁ…！！」
「えーと、ナツメさん？ろれつが回ってないし、取り敢えず落ち着こうか？痛っ、お、俺のご飯あげるから！！」
妥協案を辛うじて提示すると、ナツメの枕を持つ手が止まったから、俺はすかさず取り上げて代わりにご飯を目の前に出した。

ー……くるるるぅ…ー

ナツメのお腹の虫が早く食べさせろと抗議する。涎が垂れてきそうだったので
「…食べていいから。」
僅かに名残惜しいが、俺の部屋を滅茶苦茶にされる訳にはいかないのでご飯……サンドイッチを生贄に…。
俺の扱い、酷くねぇ？
ナツメの口に運ばれていくサンドイッチを羨ましそうに見ながら、俺はナツメの飲み物を取りに行った。

「…落ち着きましたか？」
はぁはぁ、と息を荒らげているナツメに俺は恐る恐る（まだ怒っている可能性も充分にある訳で）尋ねてみる。
「落ち着いた。だが、あのことを許した訳じゃないからな。」
（まぁ、分かっているけどさ…。不可抗力だから言い訳ぐらい聞いてくれても…）
「姉様ー。ちょっと、かむひあーです。」
ユサギが、しゅば、と手を上げてナツメを呼ぶ。ユサギは、今までしていたゲームをぶち切り…やめて欲しいんだよなぁ、それ。…俺がしていたあの古いゲーム機（勿論、カセットはアレだ。）を繋いで、タイトルを映し出す。そしてコントローラーをナツメに握らせた。何も反応は起きない。
「…やっぱり、ゲームの世界は崩壊しちゃってますぬぇ。」
ぱ、とナツメの手を離し、ゲームをやっぱりブチ切り。
「はぁ……分かってたけどぉさ。集さーん」
「あ、何だ？」
「何か他に無いんですかぁ？」
「無い。他のは殆どクリアー済みだし、それは壊れてしまったし。」
「……まじすか。」
ユサギが部屋を見渡しても、壊れてしまったゲーム機以外に他のハードは見つからないしPCなんて以（モッテ）てのほか。
俺はクリアーしたモノは即刻売る主義だからな。
「うぅぇー……。暇ぁ…。」
ユサギが、むすっ、と頬を膨らます。それからユサギは何か閃いたのか、俺とナツメの腕を掴んだ。勿論、何をしたいのかなんてのは分からない。だが、ナツメはある程度予想は出来ているらしく…分からないの、俺だけかよ。
「……一応、聞くが。ユサギ、何をするつもりだ？」

「え☆ゲームが崩壊しても“神力（チート）”の力は健在なのかぁ、試してみようかなって☆てへっ☆」
「俺は、必要無いだろぉ！！」
「新鮮なリアクションが見られる数少ない人だからねぇ～。」
ユサギの、俺の腕を掴む力がまぁ強くて。成すすべも無いわけで。
逃げようものなら、二人分のアッパーか何かを喰らう訳で（多分）
「…行かなくてもいいという選択は？」
「「無い。」」
正に異口同音。二人の俺を見る目がとてつもなく怖いです。
「それじゃ、れっつごぉ～☆」

結論：ユサギもナツメも何も変わらない。変わる筈が無いということで。

対処２１．チートはチートのままでした！？（後書き）

第二章、開始です（、・ω・´）
今回も、ナツメとユサギを中心に巻き起こる騒動に集が巻き込まれますｗｗ
今回の第二章は、集の日常も織り交ぜられたらと考えています。※予定、ですのでもしかしたら変わるかもしれません。ご了承ください（、・ω・、）

対処22．Qチートにリハビリは必要ですか？Aいいえ。必要なかったです

ユサギにされるがまま、俺はやっぱり転移（ワープ）に巻き込まれて。
強い光に包まれたと思ったら、いつもの、コンビニの駐車場に立っていて。突然の事だから、俺の装備は……軽く羽織った灰色のパーカーと、白い線の入った黒の上下のジャージ。…年明けなのか、コンビニには正月の飾りがあった。だから、この現時点の装備はかなり寒い。
「…寒いんだけど。」
「流石の私も…少しは寒いかなぁ…なんて☆」
ユサギはわざとらしく体を震わしている。まぁ、確かに肩と足が大胆にも露出されている服だから寒いのは寒いだろう。
「さて、と。ここまで来られる“神力（チート）”は残っていると。」
ユサギと同じように肩を出しているナツメは、全く寒さを感じていないっぽい。……流石にこれも“神力（チート）”なのかと自然に納得している。慣れって怖ぇ。
「今度は、並木道の先の公園まで行ってみるか。」
「？何で。」
「姉様は“神力（チート）”が残っているのかを試したいんですぉ☆」
「でも、ユサギは何かしたかったからここまで飛んだんじゃないのか？」
「別に☆ただ部屋にずぅっと閉じこもってないで出たかっただけなぁので」
「あ、そ……。」
遠まわしに俺をちくちく毒舌してる気が……。
「それに。気付きません？姉様、外に出て顔が明るくなっていますよね？まぁ、私はそれで満足しましたし？」
「おい。さっさと行くぞ。」
先に進んでいたナツメが振り返って足を止める。確かに、何処か顔

が明るいような……。俺は（後で聞いたが、ユサギも）思わず笑って、ナツメに追いつくために歩みを速くした。

公園は誰も居らず、まぁ…年明けだし、皆初詣に行ってるのだろう。ここでならあの無駄〜に“神力（チート）”を見られる心配も無いか。

「それで、姉様。何をするんですかぁ？」

「取り敢えずは……」

ぽ、と小さな光のような…火のような物をナツメは手の平に灯した。その光は次第に大きくなり。

「…桜花繚乱（オウカマイヒメ）」

桜の花弁が一斉に光から飛び散り、雪と相まって何処か幻想的な風景を醸し出している。桜はほんの少し光を伴って。

「うわ……。」

「ふむ。これぐらいなら楽勝か。まぁ、初歩中の初歩だからな。」

「これも、攻撃の魔法なのか？」

「いや。これは単に観賞用だ。戦ってばかりが勇者（ヒロイン）の任務では無かったからな。」

「これで、色んな人達は癒されていたんです。そして、帰還していった。」

「帰還？」

「あのゲームでは、ネットからログインされた人間（プレイヤー）と最初から存在している役者（ノンプレイヤー）がいました。人間（プレイヤー）は長い間、ゲームの中に居ると次第に現実世界の感覚が薄れていく。その消えた現実世界へ戻りたいという感覚を…この桜が思い起こすんです。だから、この花弁は癒やしと齎すと同時に希望でもあったんですよ。」

ユサギの手に桜と雪が相まって落ち、手の暖かさで溶ける。溶けたその二つは混ざり合い、桃色の光の雪になる。

「……さて、ここからが本番だ。」

ぽぽぽ、と連続で光が灯る。光は今度は熱を伴って、周りに落ちて

染みていく。
「桜花焔山茶花(オウカカギロヤザンカ)！！」
「うわ……三つの奥義の一気発動…。」
「これがどうかしたのか？」
「普通、奥義は一つずつしか発動出来ないのです。でも“神力(チート)”なら最大…幾らなんだろう？かなりの数の奥義を一斉発動出来る筈ですぉ？私は“神力(チート)”は持っていないのでぇ、詳しいことまでは何とも言えないですね。」
「え？ユサギはもってないのか？」
「はい。私は只のすこぉし強い力が有るだけの役者(ノンプレイヤー)なので☆」
ぼぉぉ、と勢い強く燃え盛る炎の近くに居るのに俺は全く熱さを感じなかった。炎は鞭のように細長くなって、ナツメの手元に滑る。
「……ふっ。」
ナツメがそれを軽く振ると、蛇のようにうねって俺の足元に当たる。
「危なっΣ（´∀｀；）」
「ふ、冗談だ。これに当たっても火傷はしないから安心して当たってくれても構わない。」
いやいや。火傷以前に怖いっつーの！！
「それが連繋(レンケイ)奥義の派生奥義ですか？」
「あぁ。名付けるとしたら……桜焔魅蛇(オウラミヘビ)」
新しい技(らしい)の先は、ばちばち、と鼠花火のように独立してうねる。…だから、その先がこっちに飛んできそうで怖いんだっつーのぉ！！
「ふむ。こんなものか…まだ力は残っているらしいな。」
「寧ろ、パワーアップしてないか？…お前のアッパーやら蹴りも威力が上がってたぽいし。」
「……そうか。」
ナツメの手に、バチバチ、と音をたてている炎。…さっき、消しましたよね？あれ？
「お前、これの威力を試す実験に自ら名乗り出てくれるとわ、なぁ？」

「い、いやいやいや。遠慮させていただきますっ！！」
俺はナツメから全速力で逃げる。後ろからナツメが何かしら叫んでいるが、それで止まる訳にはいかない。と、いうものの。
「お前、ぶちのめすっ！！そこで静かに首洗ってろぉぉ！！」
「いーーーやーーーだ！！」

「……あははっ☆」

「ユサギも笑ってないで、なんとかしろし！！」
ユサギの笑いが消える。直ぐに現れた笑みには悪戯心が惜しげもなく滲み出ていて。…これはやばいパアアターン！？
「では、何とかしましょう☆」
じゃき、と取り出されたのは…あの鎌。
あぁ、これ…逃げるオンリーだな☆
「ちょ、まっ……！！」

「アレ～？どしたの？」

対処２３．日常と異変と恋模様と

「アレ～？どしたの？集。」
暫し流れる沈黙の後。
「……よぉ、樹沙羅（キサラ）」
「どういう関係ですか～？」
「どういう関係か、包み隠さず吐いてもらおうか？」
あ、目がヤバイ。二人の武器を持つ手に力が篭もりまくり。
マジで死ぬかも５秒前☆

「……沢井樹沙羅（サワイ キサラ）。俺の昔からの幼馴染だ。」
「はい。幼馴染の樹沙羅（キサラ）です。キサって呼んでください☆」
盛大に殴られた箇所を押さえながら俺は軽く説明する。その後の事は本人達に任せて頭を冷やしに、水場に向かった。
「キサ、さん？えっとユサギと言います。よろしくお願いしますね。」
「ナツメだ。よろしくな。」
「はい、ユサギさんにナツメさんですね。はい記憶しました☆」
にこにこ、と笑うキサにユサギが尋ねた。
「あの、さっきの……見てました？」
「さっきの？なんのこと？ウチは集が何か騒いでいるなーとは見てましたけど、お二人には近づいて初めて認識出来たので。」
（認識出来なかった…？）
「どういう事、ですか？」
「あ、ユサギさんは何か小さい女の子だなって遠くからは見えたんですよ。でも、ナツメさんはこんなに近くに居ても何かぼやけて見えるんです。」
キサが困ったように笑う。二人はそれ以上は追求せず、話を変えた。

「キサさんってここからお家までどのくらいの距離があるんですか？」
「歩いて……４０分位ですかね。」
「自転車とか使えばいいだろうに。どうしてだ？」
ナツメからの問いに、キサはさっきの笑顔を隠し俯いてしまう。
「……キサ。家は大丈夫なのか？」
帰ってきた集にキサは飼い主に懐く犬のように、にこにこ、と笑う。
「うん。今は症状も安定しているし、それにいきなり自宅警備員（ニート）になったアンタの方が心配だしね。」
「悪かったな」
「別に。只、外に出られるようになったんだから……亜希ちゃんには一度会いに行った方がいいよ。かなり心配していたから。」
集は頭を掻き、明らか様にめんどくさいというような顔で。
「あっちも俺の事なんて気にしていないだろう？三年も行ってないんだから。担任でもないんだし。」
「そんな事ないよ。溜まったプリントを届けるかどうか、迷ってたし。」
二人の間で次々に交わされる会話を
「ちょっといいですか？」
ユサギが縮こまって手を挙げて、一回止める。
「亜希ちゃん、って…誰ですか？」
「あぁ、俺達の一年の時の担任だったんだ。」
「一応、コイツも高校生だからねぇー」
「へぇ……。」
ナツメが何処か上の空な様子で、取り敢えずの頷きを返す。
「ナツメさん？大丈夫ですか？」
キサが顔を覗く。
「あぁ、平気だ。すまない。」
「家に戻るか？俺は少し寄る場所があるから、帰りが遅くなるけれど。」

「はい。分かりました…私も一度戻りますね」
ユサギとナツメは公園を後にした。
「何処に行くの？」
「亜希ちゃんに会いに行けって言ったのは、何処の誰だっけか？」
「行くの！？今から！？」
「今は正月だろ？神社とかに行けば、会える筈だろ。」
「じゃあ、私も一緒に行っていい？亜希ちゃんに会うのは久しぶりだし」
キサは俺の腕に、自分の腕を絡める。俺は顔をゆで蛸にしながら、離そうと腕を振るが、一向に離れない。
「いいじゃん☆今日限りの…正月限定の恋人ごっこ☆」
やけに幸せそうなキサの笑顔に、俺は観念してそのまま歩き始めた。

「姉様……？」
「ユサギ、もしかしたら…私は…」
ナツメの表情は髪に隠れて読み取る事は出来ないが、今までに無い何かしらのショックを受けているようだった。
「時折、体にブレが生じているんだ。頭に雑音（ノイズ）が響く時がある。…まるで、私が異物であるかのように。」
きゅ、と自分の手を握るナツメ。その手には何も異常は見つからない。今は。もしかしたら、明日、何か起こるのかもしれない。
そんな不安の大海に、ナツメは一人、漂っていた。
「きっとここに慣れていないんですよ。まだ、帰ってきて一日も経っていないんですから。気長にいきましょう？」
「気長、か。それだけの時間が私に残されているのか…？」
「どういう事ですか？」
「＜アイツ＞が最高の玩具（ユウシャ）と称していた私をこのまま野放しにするとは思えないからな。」
「何かしらのアクションが起こる可能性がある、と？」

「かも、な。」
二人の間に流れる僅かな沈黙。
「……キサさん。実るといいですね。」
ぽつり、とユサギが呟く。
「何の話だ？」
「キサさん、きっと集さんの事が好きなんですよ。」
「？そんな風には見えないが？」
「姉様はおこちゃまですね☆」

ナツメは『恋に鈍感なヒロイン』の称号を手に入れた。
ぴろりろーん。

対処２３．日常と異変と恋模様と（後書き）

今回は、少し日常的な事を意識してみました。
それとは反対に少しずつ迫る新たなゲームの予感…的なものもちょっと混ぜてみました

対処２４．日常だっていいじゃないかw

俺とキサは結局、恋人のような感じで亜希ちゃんがいるであろう神社に来た。初詣と言っても昼から夕方に動く時間帯なので人は疎らで。

「あ、いたっ。おーい！！亜希ちゃーん！！」

艶やかな赤の着物を着たショートカットのあれが……。

「おぉー、キサに……集も居るじゃねーか！！久しぶりだな！！」

見た目では大和撫子な女性の鏡っぽいこの人が俺の元・担任の亜希ちゃんこと、水原亜希（ミズハラアキ）。

「……黙っていれば、美人なのになぁ。」

「何か言ったか？ん？」

気付けば、俺の直ぐ近くまで亜希ちゃんが迫っていて俺は思わず二三歩下がる。

「い～ぇ。別に……はい。」

「ぷははっ！！相変わらずだな！！良かった良かった？」

亜希ちゃんに思い切り肩をばしばしと叩かれる。その中で、その腕が僅かに細くなっているのに気付いた。

「亜希ちゃん。希望（ミライ）ちゃんはどうしてるのー？」

「誰だ？それ？」

「あぁ、ウチの娘だよ。今年で二歳になるな。」

俺が世間様に触れていなかった三年間（ニートせいかつ）の間に、時代はしっかりと流れていた。

「それにしても、お前等。…リア充か？新年早々、リア充の香りを漂わしやがって……三才差には見えないな。」

「へ……？……あ！！」

俺は、キサと腕を恋人絡みさせている事をすっかり失念していて…解こうとすればがっちりとホールドされて。

「今日だけの恋人なんですよー☆えへへ」

「このままマジ恋人になっちゃえよ」
「あぁ、それは無理だから。そもそも俺が誰かと付き合うと思うか？」
「「無いな（でしょうね☆）」」
俺は異口同音で言われた言葉に僅かに心を抉られながら、何処か感じる違和感を無かった事にした。

「あれ？もういいのか？」
亜希ちゃんが帰ろうとする俺達を引き止める。
「折角だから、ウチのところに寄っていかないか？」
「あ、いーの？だったら遠慮なく☆」
「おい、お前……」
亜希ちゃんの後ろをキサが俺の腕を引っ張りながら追いかける。
「折角のお正月だもん☆楽しまなきゃ、損だよ？」
「お前が餓死しないように食べ物も少しは恵んでやるさ。心配すんなって」
あぁ、この二人にも逆らえない気がしてきました。

寝転んで見える空みたいに近くって、でも立って見る空みたいに遠い距離。
それでも、一緒にいられる事って幸せだと思う。
たとえ、ずっと叶わないとしても。

神社から１０分程歩いた先に見えた綺麗な家が亜希ちゃんの新居だった。
最初は本当にいいのか、迷ったりはしたんだけれども。
「希望（ミライ）、おいで」
「こんにち……は。」

「こんにちは」
俺は礼儀正しい（二歳かっつーぐらいの礼儀の良さ）の女の子…希望（ミライ）ちゃん…に挨拶する。
「ごめんねー、このオッサンの目つき怖いでしょ？気にしないでねー☆寧ろ、存在を無視してもらってもいいからねー」
キサが希望（ミライ）ちゃんを手招きして、自分の腕の中に閉じ込める。
「ふむ、相変わらずのモフモフぅ～？あいでっ！！」
「こら。変態発言はやめろ」
亜希ちゃんがキサから希望（ミライ）ちゃんを救出すると、キサの頭に特大のにっぶい音。……亜希ちゃん必殺の拳骨…。アレってかなり痛いんだよなー。
「集、これぐらいでいいか？っつーても、餅とか…正月に食べる物ばっかだけど保存出来るヤツ揃えたから大丈夫だろ。」
「あぁ、ありがとう。最近、また料理してるからさー食材が足りねぇんだよね。」
「料理？お前がか？」
「悪いかよ。」
確かに、今まで料理の＜り＞の字も知らなかった俺だから驚くのは分からんでもないけどな。
「誰に作ってんだぁ？彼女か？」
「えっ！！？」
何故キサが反応した？
「俺一人に決まってるだろ、何言ってんだ…。」
「お前一人だったら今まで通りで変わらない筈だろぉ？」
流石俺の元・担任、俺の性格をばっちり掴み済みと。
「で？誰だ？白状しないとウチの裏情報網で調べ尽くすぞ？」
「亜希ちゃんの非公式ファンクラブってマジでそういう事してそうなぐらいのクォリティーだもんね」
「ま、ウチは知ってるんだけどな。」
「俺も昔、何回か勧誘されたし…写真も訪問販売的な事されたなぁ」

「……何時からあったんだ？」
「入学式の日に発足してた。その時には既に…新入生の半分は入ってたな。」
「恐るべし、亜希ちゃんパゥワー」
キサが机の上にあった砂糖醤油の絡まった餅を我がもの顔で食べる。
「でも、最近は一人じゃないのもいいなって思うけどな。」
「彼女か！！彼女なのーーかぁぁ！！」
「だから、ちげぇっての！！」
貰った食べ物を手に、俺はキサが餅に気が逸れている間に亜希ちゃんの家を出る。
別に、居心地が悪かったとかじゃなくて…家の二人が物凄く気になってしまったりして。
（こんな風になるなんて、一週間前には想像も出来なかったな）
ふ、と息を空気に溶かす。その感じが懐かしくて、何度も何度も繰り返した。
「あっれぇ～？高校生にもなる集さんが、子供じみた事をしていますねぇ～？」
「……いつの間に。」
「勝手に置いていくなんてひっどぉい！！折角のお餅だったのにぃ～。」
キサの泣き言を嫌でも聞いていれば、自分に罪悪感が出てくるのは至極真っ当で。
妥協案として
「俺の部屋で貰った餅でも食うか？」
普通の少女なら、ここで慌てふためいて帰る筈なのに。
「え！！いいの！？」
妥協案が、あっさりと現実になりましたとさ。
結論：俺の周りは普通じゃない。

対処２４．日常だっていいじゃないかｗ（後書き）

久しぶりのコメディちっく。
ナツメとユサギが出てこなかったのは、シナリオ上の事であって…
嫌いとか言う訳ではないので（＊´∀｀＊；）

対処２５．あま～い食前デザートはどうですか？

「ねぇ、アレ食べたくない？」
片手に焼き芋を持ちながら、キサは俺の腕を、くいくい、と引っ張る。
指さす先にはコンビニエンスストアの焼き芋の機械。
「キサ。一つ確認しようか？」
「あぃい？」
「これで、何個目かな～？」
「んぅっと……５個目かな～？」
俺は思いっ切りキサの頬を抓り上げる。勿論、手加減などしない！！
「い、いふぁい～いふぁいぉ（痛い～痛いよぉ）もふ、ほれれさいほにするから～（もう、これで最後にするから～）」
「……それをもう一回使ったら、金輪際、お前の事無視するからな～」
「いてて……りょーかい」
はぁ、と俺は溜息をついてコンビニエンスストアの焼き芋を一個買う。
だが、そこで、はい終わり…という訳にはいかないので
「買ってきたぞ～」
「ありがと……って」
「どうした？」
明らか様に何か企んでいるような顔をしながら俺は、買ってきた焼き芋を食べようとする。
「私の焼き芋ぉ……。頂戴ってば～」
「なら食えば？」
ほい、と言って俺は若干口にした焼き芋顔の前でひらひらさせる。
「ん……いい匂い」
「だから、食べてみればって」

キサの歩みが止まっているのを丸っきり無視して、俺は焼き芋をひらひらチラつかせながら歩く。
「早くしないと家に着くぞ。それまでにどうするか決めないとナツメにでもあげるからな」
「ナツメ、さんに……？」
「あいつなら喜んで食べるだろうからな」
不意に速くなったキサの足音が気になって振り返ったら

ーぱくっ……ー

俺が持っていた焼き芋を齧っていた。しかも俺が若干口にした部分に近い所を。
「えへへっ、おいしっ☆」
にかっ、と笑うキサに対して俺は顔が焼けてしまう程に赤くなった
（だろう）
まさか、年頃の少女がするとは思っていなかったから。
「やられたっ……」
結局、俺は諦めて焼き芋をキサに渡す。さっきから変わらない笑顔の中に
『ざまぁ☆』
とか思われていそうで何か手玉に取るつもりが、手玉にされてしまったような気持ちだ。
少しだけ食べただけだったが、ほんのりと甘味が感じられていておいしかったから余計にキサに渡したくなかったのだが……。
「はふはふ。」
「美味しいか？」
「うん、集が買ってきてくれたものだから余計に美味しいよ？」
キサは時々、さらり、と照れるような事を平気で言う事がある。おまけに、子供っぽい無邪気な笑顔もついてくるもんだから学校での人気は入学の時からかなりあった。だから、俺にたまに…てめぇ、

調子にのってんじゃねーよ…みたいな感じで色々あったりしたんだけれども。
「ねぇ」
「どうした？まだ足りないとかほざいたらぶっ飛ばすぞ？」
「怖っ！！笑顔で言わないでよ…余計に怖いからっ」
「嘘、冗談だから。それで、どうしたんだ？」
「集の家にも食べ物って沢山あるのかな？」
「食べるなよ。っつーか、それ食べても足りないんだったら今すぐ亜希ちゃんの所戻って食べ物貰ってこい。んで俺の所じゃなくて自分の家で食べろ。」
「冗談だから！！ね？それにこれ以上は流石にキツイかなー…って。」
「ふぅーん」
「本当に！！ホントのホントなんだからぁ！！」
俺の腕を、ぽかぽか、と叩く。でも、その力って凄まじく弱い。
何か妹をからかっているみたいな、恋人をからかっているような……簡単に言うと、擽ったい感じがする。
「はいはい、今回は学校の公認マドンナ・キサの可愛い困り笑顔に免じて許してやろう」
「上から目線とか……何か屈辱ぅ」
そう言い合っている間に、俺の部屋の前まで来た。
「ほら」
俺はドアを開けると、キサに入るように促す。キサは当然目をパチパチさせて何がなんだか分からない状態である
「え？何？」
「はぁ…。お前、レディーファーストって言うだろう？」
「それが今の行いに関係するの？」
「今日は俺はお前の“一日恋人”なんだろ？なら、彼女をエスコートするのが普通だ」
キサは、ぼんっ、と効果音がつく位顔を赤らめて。照れてはにかみ

ながら中に入る。
中から聞こえてきたのは。
「集さんって無自覚のタラシですね☆」
「無自覚…言い換えれば鈍感だな。」
今の話をばっちり聞いていた二人からのツッコミ（？）だった。

その後、ナツメ、ユサギ、キサの三人で話していると其々に砂糖醤油に絡まった餅が出された。
それは、三人分あった。

対処２５．あま～い食前デザートはどうですか？（後書き）

今年は本当にありがとうございました！！
思い立ったら即行動！！という性格なので完全に見切り発車だったので凄く心配したのですが沢山の人にお気に入りしてもらったり、読んでもらって嬉しかったです。
感想も貰って勇気づけられて…感謝感謝です。（。´Д`。）。
来年もよろしくお願い致します（ｗ・´）

対処２６．ゲームの始まりは我侭から！？（前書き）

今年もよろしくお願いします（、・∀・´）ノ

対処２６．ゲームの始まりは我侭から！？

「今日はありがとね、すっごい楽しかった？」
キサは俺が亜希ちゃんに貰った筈の餅の幾らかをビニル袋にほぼ３分の２詰まっている。……俺が貰った…あれ？
「んじゃ、またね☆これもありがとっ」
別にあげる、とか言った訳でも無いのだけど…とかっこんではいけないような気がするので俺はつっこまない。
「これ以上生傷は増やしたくないしな……何処ぞやの某ヒロインでもいっぱいっぱいだしな」
ぼそ、と言ったのに後ろの目線が痛い……振り向けねぇ。
「あぁ、別に構わないけど……」
「それにしても」
不意にキサが俺を見て面白そうな、安心したような笑顔になる。
「三年前とは真逆の生活になっちゃったね☆ま、私はその方が嬉しいんだけれどね」
にゅ、と俺の後ろからユサギが顔を出す。
「三年前の集さんってどんな感じだったんですかぁ？」
「うー……ん。何か孤高の一匹狼みたいな？誰にも関わろうとしなかったし、誰も近づくな！！みたいな雰囲気でさ。」
「ふむふむ」
「何か心から大切なモノが抜け落ちた、みたいな感じでさ。何するにも無気力で」
本人の前で暴露するか、普通？
「はいはい、もういいから。」
「えー……。はいはい。それじゃ☆」
キサは鼻歌混じりで帰っていった。と同時に俺の食料が減った。
「おい、集。」
ナツメが俺を呼ぶ。相変わらずの横暴さ。

「どうしたんだよ」
「……これって何だ？」
ナツメが指さすのは、テレビに映っている神社。ニュースの初詣の映像だろう。綺麗な着物で着飾った人が沢山いる。
「神様が祀られているっていう場所…神社だな。ほら、何かぶら下がっている太い紐があるだろ？色鮮やかな。」
「ほぅ、これか？」
「そうそう。それを揺らして神様に必死に願うんだよ、自分の願いをな……まぁ、俺には関係ないけどな」
元々、俺は神様とか信じないタチだから。
「ふむ……神様、か」
「確か、ここの神社に祀られている神様って八百万（やおよろず）を統べる神様でしたっけ？神の座から外れた神様っていう事で有名ですし」
ユサが神社の事について、色々補足しているが…何かおかしい。
「何でユサギがその事を知ってるんだよ」
「間違っていますか？」
「いや、合ってるけどさ……」
「ユサギ、集は何でそんな事知ってるんだよ…って聞きたいんだろう」
「あぁ、この前姉様と二人で帰った時に近所の人が話していて覚えました☆」
「覚えたって……。」
そんなのを一回で覚えられる筈が無い……のだが。コイツ（というかコイツら）になら出来そうな気がしないでもない。
「神を統べる神……か」
「へぇ……。こんな感じなのかアレで見ていたのとは違うな」

「……階段長っ…。」
というか、何故俺まで…。
話を簡単に説明致しますと……。
テレビ（ナツメ曰く、アレ）に映っていた神社に行きたいというナツメの我侭が発動した。生憎（ナツメにとってはラッキー）とその神社が近くにあったりして。んで、ユサギの固有スキル“姉様甘やかし☆”（勝手に俺が命名）が発動して俺も巻き込まれてぇのここに居ると。
「ナツメ～。気は済んだか？」
「なぁ、集。これは何だ？」
ナツメがじぃ、と見つめるのは賽銭箱。ゲームの世界に賽銭箱なんて無かっただろうから見るのは初めてなのだろう。
「これは賽銭箱。願いの代償……願いを叶えてもらうための保険みたいな？まぁ、願いを叶えてもらうためにお金を入れるんだよ、普通は」
「普通は……ですか？」
「ここの神様は違うんだとさ。俺も詳しくは知らないけどな」
「じゃあ、お金の代わりに何を捧げるんですか？」
「捧げるって……重々しいな、おい」
「で、何を入れるんだ？」
「その人が願っている事。その人が叶えたいと思う気持ち自身。」
「でも、そうしたら願いが叶わなくなりませんか？」
集はうっすらと積もった雪を足で踏む。足で踏んだ跡には地面の茶色が見える。
「それが叶うんだとさ…何でかは誰にも分かってない。只、八百万（やおよろず）を統べる神様だから何でも叶えられる…つまり、チートってることらしい」
「そりゃそうだろう。」
ナツメがぽつり、と呟く。
す、とナツメが賽銭箱に触ろうとする。

ーバチッ……ー
賽銭箱に触れようとしたナツメの手が弾かれた。
「やっぱり…な」
ナツメが賽銭箱の奥の境内の暗闇に目を光らせる。
「相変わらずの陰気さだな？今度はどんなゲームをするんだ？」
「ナツメ？」
「姉……様…？」
三人がじっと見つめる先の境内に扉が開いた。
『…はじめまして。』
開いた扉の先には、僅かに自分の背丈よりも大きな巫女服（というよりも十二単）を着た白銀の髪の少女。
『…キミ達かな？』
もう一人、同じく白銀の髪を持つ袴（これもまた、体よりも僅かに大きいサイズ）を着た少女と同年代ぐらいの少年。
幼い顔立ちだが、その顔に浮かぶ微笑みは大人びている。
「お前等は何だ？ここに祀られている神様か？」
ナツメが警戒心を露にしたまま問いかける。
『僕達は元々ココに居た訳じゃない。』
『僕達は頼まれた。ゲームの審判者を務めるようにと。』
二人の少年少女は互いの手を握る。
『あ、僕達の紹介を忘れてた。』
少女は、こて、と首を傾げる。
『私はアーニェ。』
『私はイーニェ。』
「完全にさ、オレら無視して話進めてないか？あの三人」
「確かにそうですねぇ☆」
集とユサギはため息混じりに、遠巻きに見る。
「で、頼まれたと言ったな……誰に。」
『貴方がそれを聞くの？』

『その人の事、僕達(わたしたち)よりも知っている貴方が？』
アーニェとイーニェが嗤う。
「……成程な。アイツか」
『頼まれた、ゲームの審判者(ジャルメント)を。』
『ゲームを進めないといけない。』
アーニェとイーニェは日の光を嫌うように更に境内の奥の暗闇に下がる。二人の表情が隠れる。
「……はぁ」
「姉様ぁー。どうするんですか？」
「そうだな……っておい…なんで二人共離れてるんだよ！！」
「お。珍しくっていうか、初めてナツメがツッコミになった。」
『ゲーム…するの？』
『しなかったら、僕達(わたしたち)が怒る。』
アーニェとイーニェの言葉がこれからの波乱を暗示しているように、集は聞こえた。

対処２６．ゲームの始まりは我侭から！？（後書き）

明けましておめでとう御座いますっ！！今年もよろしくお願いします！！

今年は去年以上に執筆を頑張りたいです（、・ω・、）

対処27．え、初っ端から難関クリアー？

『ゲーム……する？』
ナツメは暫し悩んでいたが、はぁ、と溜息をつくと
「すればいいんだろう？すれば」
「姉様！？いいんですか！！そんなに軽く……」
ユサギがナツメに近づいてこっそりと耳打ちをする。
「いいも何も…＜アイツ＞の差し金なら、何かしらの意図が隠されていても可笑しくはないからな。引っかかってみるのも一つだと踏んだ」
ユサギとナツメが見る先で、アーニェとイーニェが待っていたかのように微笑んで
『その言葉を待ってた。』
『じゃあ、はじめよう。僕達（わたしたち）と貴方のゲームを』
す、と暗闇の境内から歩みをぴったり同じにして出てくる。
『でも、その前に。』
『この世界は、僕達（わたしたち）には明る過ぎるから』
二人の足が同時に日の当たる場所に出てきた瞬間。
二人の足を起点に、影よりも濃い黒が街を覆い尽くす。
「んなっ……！！」
「いきなり現実無視かよ…！！」
「昼が…夜に？」
三者三様の態度を見て、アーニェが
『ここは夜じゃない。ここには、日の光が妨げられてしまっただけの世界。』
イーニェが続けて。
『だから、ここは夜じゃない。…夜は僕達（わたしたち）の敵だから。この黒は僕達（わたしたち）。』
「どんなゲームをするつもりなんだ？」

『宝探し。』
『僕達(わたしたち)が宝。』
「「「は？」」」
正に異口同音。
『僕達(わたしたち)の記憶が散らばってる。』
『それを全部集める。それだけ。』
アーニェとイーニェは暗闇に包まれた街を境内から僅かに出た顔で見つめる。その顔には何も映っていないように感じられる。
「それだけか、本当に。」
『僕達(わたしたち)が……主催者が言うのだから』
『それだけ。』
すぅ、と境内から出てきた二人は空に舞う。
『『集めて、どうなるかは…分からないけれど。』』
そう言い残して、二人は空を包む暗闇の中に消えた。
「さて……と」
集は取り敢えず、暗闇になった空を見た。
「先ずはこの街がどう変わったのかを見てからでもいいと思うんだが」
「参加する事は前提なんですねー……集さん」
明らか様に不満そうなユサギを宥めて。
「確かに…仮に<アイツ>の息があの二人にかかっていたとするならば、何かしらの異変が起こっていてもおかしくはないからな」
「むぅ……姉様までぇ…」
ナツメは一度言えば変えない性格なのでユサギはこの時点で諦める。
三人は一先ず、異変の中心である神社から出ようとした。すると、
ー……ちりん……ー
軽やかな鈴の音色が誰もいない神社に響く。
思わずユサギとナツメは周りに気配が無いか、直ぐ様確認する。

だが、周りには自分達しかいない。

ー……ちりん…ー

ナツメが静かに術の発動の準備をする。

「姉様！？ストップ！！」

ユサギがナツメの術の発動の布陣を自分の術で相殺する。

「あれ……」

ー……にゃあ…ー

一匹の黒猫が境内の中から出てきた。その黒猫の口周りには何か白い液体が付いている。

「おいで……」

ユサギが猫を呼ぶと猫は素直にユサギの所まで来て、手にすりすりと頬をすり寄せた。

「人慣れしていますね」

「何であの中から出てきたんだ？」

猫は暫くの間頬をユサギの手にすり寄せていたがその手から離れると

ー……とん…ー

集の肩に軽く飛び乗った。

「え、ちょっと……」

「よし、それでいいな。ここからさっさと出るぞ」

「そうですね☆集さん、その猫を置いていくなんて事しないですね☆」

「うっ……」

猫はさっきよりも機嫌良く、ごろごろと喉を鳴らした。

こうして、三人ともう一人は神社を後にした。

『ねぇ、アーニェ。』
『ねぇ、イーニェ。』
暗闇の覆い尽くす所をアーニェとイーニェは漂う。
二人の眼下に見えるのは、暗闇に覆われている街の内部。暗闇に包まれて、街全体が暗くなっている筈の街は何故か明るく、日常を切り取ったように見える。
『アーニェ。ここから見るとさ。』
『イーニェ。この街を見ていると』
『『何だか、寂しいんだ。』』
アーニェが何処かに、何かに、切望するように街を見つめる。
『<あの人>の事、信じているの？』
イーニェが何処かに、何かに、恐れているように街を見つめる。
『信じてる訳じゃない。只、<あの人>ならずっと迷っている僕達(わたしたち)に終焉をくれると思った。』
くすり、とアーニェが微笑む。
『うん、一緒だ。考えている事が』

街を見回った三人は僅かに変わっていた様子に驚いた。
街の建物は特に変わっていなかった。
只、人々の様子が変わっていた。
「誰もが止まっていますね」
ユサギは商店の店先に座っている老婆に触れた。だが、老婆は何の反応も示さない。しかし、体温はしっかりとある。
「只、人形のように……ということでもないんですね。」
「私達に危害を加えなければ特段、気にする事でもないとは思うが…長時間、この状態では…」

「やっぱりヤバかったりするのか？」
ナツメは時間が止まってしまった周りの人々を見回す。
「普通の人々は私やユサギみたいな“異物”を受け入れられるような精神力は持っていない……お前やキサみたいなのは例外だがな。」
「……？でも俺達は何回も外に出ているし、色んな人にも会っただろう？」
「集さん。ならどうして、公園で術を発動させた時にあんな大きな音がしたのにキサさんしか気付かなかったのですか？」
「あ……。」
「私達（わたしたち）は普通（ユサギ）の人には“幽霊”…視覚出来るとすれば靄（もや）のようにしか見えない。発動させた術にしても然り。」
「でも、今のように強制的に体に術を打ち込む事はかけられた人にかなりの負担があります。」
「簡単に例えるなら、水の中で息が出来ない…みたいなモノだな」
ナツメの簡単な例に集はこの街の状態が既に“異変”に包まれている事を漸く理解した。背筋に冷や汗が滲む。
「このままだったら……ここは」
三人はそれ以上何も言わなかった。その結末は分かりきっていた事。
「あの二人が言う＜記憶＞とはなんでしょうか。」
ユサギが一番疑問だった事を口にする。

『記憶の事。教えてあげる。』
『この街の事。分かってもらえたみたいだから。』
「アーニェとイーニェ……？」
三人の頭に響くアーニェとイーニェ、二人の声。
『僕達（わたしたち）の記憶。僕達（わたしたち）にも詳しい事は分からない。』
『でも、僕達（わたしたち）の頭に響く声が教えてくれた。それを教えてあげる。』
「そんな事して＜あの人＞は怒らないの……？」
『大丈夫。だって今、黙認している。』
『きっと今も楽しんでくれているよ。』

「だろうな…。<アイツ>は楽しいモノは放置するからな。今頃、何処かで傍観でもしているんだろう」
『声は教えてくれた。記憶の詩を。』
「詩……？」
『一度しか言わない。』
『一度しか言えない。』
「ユサギ、準備。準備出来次第開始しろ。」
「分かりました。」
す、とユサギの目が閉じられる。

ー何処かで消えた双の魂。消えない魂は彷徨って。
心の拠り所を探して彷徨ってー

ー消えない魂遂に見つけた安住の場所。そこは薄れた記憶の最終地点。
全てが黒く、全てが朽ちて。時の止まりしその場所にー

ー二人はその場所安住とし。だが、時の流れに場所は委ねる。
全てを再び失った双の魂は神を拠り所として再び身を委ねるー

ー野に咲く花々が双の魂を癒やし、木々が双の声をかき消す。
双の魂、それを糧に今だ彷徨うー

『この詩が分かるなら。』
『僕達は只、見ている。』
「ユサギ……？」
集の見る先で、ユサギの目には何かしらの幾何学模様が点滅する。
それは次第に目全体を覆って水面に落とした石が映し出した波紋のように消えていく。
「記録、完了しました。」

「全て黒く、朽ちた場所……。」
「集？」
考えていた集は確信を持ったような顔つきになった。
「黒く朽ちた場所を知っているって言ったら、どうする？」

対処27．え、初っ端から難関クリアー？（後書き）

さて、始まりました第二章。今回のゲームは“宝探し”です。
ちなみに。ここの二章から新しいキャラクター、アーニェとイーニェが出てきますが一応の見分け方としては……先に話し始めるのがアーニェです。（一応ね（，∀、＊））

対処２８．最初の一歩＜ヒントごそごそ編＞

「全部が黒く朽ちた場所……って？」
集に案内されるまま、ユサギとナツメは時間の止まった街を歩いていた。街の雰囲気は何処かゴーストタウンのように静まり返っていて。
「ずっと前にさ、俺の生まれて直ぐぐらいかな……郊外で一つの火事があったんだよ。普通の火事の……筈だったんだけどな」
「筈だった？」
ナツメが聞き返すと集は若干言葉を濁しながら。
「その家には火事の当日に、二人の子供がいたんだよ。なのに…火事の跡を幾ら探してもその子供の遺体は見つからない。」
じゃり、と道に砂利が混ざる。ナツメが振り返れば既に街はかなり遠くに見える。
「郊外だったこともあって、つい最近まで放置されてたけれど今は更地の筈…」
三人の目の前に広がる更地。そこの地面一杯に光る黒。
「あの、今更なんですけど……本当にここなのか、それに今後のヒントも得るために役所に行って確認してみませんか？」
ユサギがゆっくりと小さく手を挙げて提案する。
「確かに…ここがそうだとしても、次のヒントがない訳だからな……ユサギの言うことも一理あるな。」
「じゃあ、行ってみるか？また街に戻るから時間掛かるけど。」
ユサギの提案を受けて、三人はその場を離れた。
一人の微笑みに気付かないままに。

「ここ。役所のくせにオシャレだって有名なんだよ、市役所。」
「やっぱりというか、ここもしっかりと時間は止まっていますね。」

「今なら寧ろ都合がいい。さっさと調べるとするか」
煉瓦造りの役所に入り、一番奥の市長室に入る。そこには誰もいなかった。
三人は何か起こる前に、と本棚を探し始めた。
「無いですね……もしかして、無駄足だったかも…」
「てか、ここの市長ってどんだけここの街が好きなんだよ。街の記事ばっかりスクラップされてるし。」
集が思わず苦笑しながら、それでも手を動かす事は止めない。
「はぁ……。」
疲れたのか、ユサギが、ぼす、とソファーに座ると
「あれ……？」
何かこつん、と手にソファー越しに当たる。ソファーを捲ってみると
「姉様。これってスィッチ……ですか？」
ユサギの手のひらには小さなスィッチが乗っている。
「っぽいな……何のだろ…ってナツメ！？」
集が止めようと制止を促したが既に遅し。
「取り敢えず押す。それから、だろう？」
ごごご、という音もせず、静かに市長が座る椅子の下に地下に続く階段が現れる。
「何か…ありそう？っていうかそんな気しかしない。」
集が階段の先を覗くとその先には電気のような光が灯っていた。
「さて、行きますか☆」
ユサギがさっさと階段を降りていく。続けて、ナツメも降りていく。
短い階段を降りた先には、小さな部屋があった。
そこには数多くの絵画が飾られていて、時の止まった市長がそれらを懐かしむ目で見ていた。
「この絵画が何か……？」
す、とナツメが絵を撫でる。すると、僅かに絵の具らしきものが指に付着する。
「何だ……これ？」

「埃…？でもここの部屋って綺麗…だよな」
「まるでこの絵だけを神聖化して、大切にしているようですね。」
描かれているのは色とりどりの花に囲まれて微笑む二人の子供の姿。
「この子供たちに何か深い思い入れがあるのでしょうか？」
ユサギは優しげな瞳の市長を見る。
「取り敢えず、収穫はこれぐらい……か。」
集はバインダーに閉じられた書類を軽く挙げて示す。
「この中に今までの街の記事が幾つかあったから、これを見れば分かるかもな」

『早いね。もう見つけられちゃった。』
『流石、って言えばいいのかな。ちっ、って怒ればいいのかな？』
アーニェとイーニェが眼下に見える街を眺めながら無機質に話す。
『でも』
アーニェが、ごろり、と街の上に寝転がる。
『何だか展開が早くてつまんない。』
『でも、いい。これで僕達(わたしたち)が終われるのだったら。』

“あ～ぁ。折角、楽しませようとしたのに。”

何処からか響く、重く、明るい声にアーニェとイーニェはぞくり、と背筋を震え上がらせた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5849y/

RPGヒロインという名のチート野郎。

2012年1月6日22時54分発行